

# 冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



7月号・2025年

## 第64回 冬雷大会のご案内

今年の冬雷大会は、次のようになります。

日時 十月十二日(第二日曜日)

午前十時より四時半までとなります。

懇親会は五時より七時半までです。

\* 大会参加費用詳細は現在検討中です。

会場 ホテルルートイン東京・東陽町

(地下鉄「東陽町」駅より徒歩5分)

大会用詠草(未発表作品一首)を八月三日必着。

\* 出詠費一〇〇〇円を添えて事務局宛。

\* 本誌綴じ込みの出詠用紙をご利用下さい。

\* 年々参加者の数が減っております。年齢を重ねると、なかなか思いうに外出もできなくなります。逆に言えば、自由に動けるうちにといいこともあります。ご都合の良い方は、ぜひご参加下さい。

《冬雷短歌会》

## 7月号 目次

|                       |                |
|-----------------------|----------------|
| 冬雷集                   | 1              |
| 作品一                   | 20             |
| 七月集                   | 35             |
| 残響集                   | 40             |
| 作品二                   | 50             |
| 作品三                   | 56             |
| 五月号冬雷集評               | 山本三男 15        |
| 大友柳太朗と美空ひばり②          | 大山敏夫 16        |
| 五月号作品一評               | 小林芳枝・藤田夏見 42   |
| 五月集 / 残響集評            | 鈴木やよい 44       |
| 久保田登歌集『百花蜜』を読む        | 桜井美保子 45       |
| 五月号作品二評               | 井上菅子・江波戸愛子 46  |
| 五月号作品三評               | 桜井美保子・橘 美千代 48 |
| 五月号十首選(冬雷集・五月集 / 残響集) | 50             |
| 五月号十首選(作品一・作品二・作品三)   | 52             |
| 交流他誌(ご批評御礼)           | 55             |
| 写真歌集『桜だより』紹介          | 59             |

# 冬雷集

赤間 洋子 東京

遂に來た九十歳の誕生日冬雷会員にはまだ上がある

わが母が百三歳まで生きたゆゑ百二十歳までと愚息は言ひぬ  
ふた組の教へ子が集ひ我が卒寿を祝ひてくるる感謝感謝

來年は還暦を迎へる教へ子達高校時代の思ひ出語る

化学のテストで赤点取つたと言ふ男子追試の話も遠き思ひ出

我が染めし藍染の布で服を縫ひ着せてくれたる教へ子がをり

残りの布で小さき袋数多縫ひ参加者に配る幹事の女性

初めての卒業生からも電話あり先生は卒寿私は喜寿と

次々と友人からも電話ありLINEの祝辞にはケーキの絵を添へ

兼 目 久 栃木

国内の製造業のためといふトランプ大統領したたかに言ふ

堤防の傾斜の下に植ゑてある桜木は下へ伸びて花咲く

桜咲く季節を迎へ車で20分市内の名所を訪ね見んとす

小田代ヶ原中ほどにある白樺は皮を食はれて無残な光景

座席にて眠る人ありあくびをする上を見る人多彩な風景

チョコレートの甘い味をば賞味せり後に惹<sup>あし</sup>かると残りを食べをり  
 小さき木も大きな木も芽を出せり大小さまさま春を感じり  
 寒き朝ぶるぶる震へ零下ちやうど部屋の暖房のスイッチを入れる

山崎英子 東京

六地藏赤き頭巾に赤まへだれ新調されて微笑むがに在す  
 みやしろの鳥居を高く高く越えて立つ銀杏並木は鬱蒼として  
 窓外のスカイツリーは高々と先端見えず雲のなか  
 娘より送られ来たるカーネーション鉢埋めて咲くピンク鮮やか  
 公園の花壇の真中に雑然とナルコ蘭ひと群風にゆらげり  
 み寺の庭の六地藏今は庫内に旗のみが立ちをり

森藤ふみ 東京

ゆつくりと歩めばいつもの散歩道スマホにきざむ歩数の増しぬ  
 催事場に燕三条の金物店出でをれば茶こしを買ひたり  
 木製の摘み割れたる鍋蓋を店員に見せ替へはあるか聞く  
 黒光りする樹脂製の摘みつく鍋蓋使ひ今日も料理す  
 花の苗植ゑてる人に名をきけば袋を見せてクレマチスです  
 花の名を覚えきれずに聞かれても困ると話すボランティアの人  
 白と黄の混じる花の名スヒカヅラと教へてくれる通りがけの人  
 花に蜜あるからと言ひ一つ取り細き先端吸ひて見せくる  
 トイレ貸して下さいと言ひ男性入りくる調剤薬局に

## 風

櫻井一 江 東京

春風を受けつつ来たる海水は魚介ともなひ運河上り来る  
 再開発の高層ビル下運河沿ひ釣りをする人一人か二人  
 クロダイの二尾を釣り上げ更に竿かざす人あり無風を言ひて  
 岸壁に張り付く貝を餌にして魚釣る知恵の少しを聞きぬ  
 開発の計画たりし親水プロムナード運河沿ひ一直線に歩行の弾む  
 風の無き青葉の茂るビルの庭噴水に触れゐる子等響かす歓声  
 夕つ方散歩に出でてビル風に煽られ運河の手すりに掴まる  
 唐突にビル風強く我が玄関ドアを圧して片手で開かず  
 春風に樟の枯葉カラカラと我を追ひ越し吹かれ行きたり

有泉泰子 山梨

公園で遊ぶ幼ら走り来て桜が咲いたと指さしさけぶ  
 桜咲く公園のベンチに空仰ぐ入学入社の孫らを思ひて  
 静かなる隣の空地に家建つと工事車三台一日にぎはふ  
 結婚し六十年近く元気なる夫突然に歩けぬと言ふ  
 膝下より丸太のやうに腫れ上がり杖をつきつき車に乗りぬ  
 予約して来たる病院の待合室いづこも満員待つこと二時間三十分以上  
 手術せず様子をみると若き医師笑顔が薬杖軽く帰る

富田眞紀恵 富山

梅をはり桜もそろそろ散りそめてしづかに季節すぎてゆくかな

春の日の青葉のなかにひそみをり吾には遠く青春の日々  
幼らの明るき声にさそはれて見あぐる空の鯉のぼりかな  
ひっそりと季節のうつろひ見せてゆく小さな庭にありがたう

野村 灑子 千葉

関連をつけてしつかり介護者の名を覚えむと名札に目をやる  
初に会ふ介護者の名を覚えむと顔と姿に特徴みつく  
一人用の特養の風呂に湯の満ちてサヤエンドウの中の豆のごとある  
高校野球の敗者となりたる丸刈りの生徒らの首筋汗に光りぬ  
今時の若き等の服デレデレと出しつ放しの着方美しいとは思へず

青木 初子 神奈川

鯛釣り草独り静とドクダミの繁る葉陰に芽を出してをり  
どくだみと水引草は庭面の黒土覆ふわがもの顔に  
昨年の秋水引草は抜く前に種飛ばししか緑の繁る  
暑き日に身の焦げさうな昨年の夏遣り水さぼり花咲かぬあり  
大ごとにならず十年二個育つ動脈瘤は我が脳内に  
動脈瘤手術を医師に託したり身に障りなく退院の幸  
筋肉の落ちて体幹定まらずフラフラ術後九日目退院

中村 晴美 茨城

雨多き五月になりてわが庭の山紫陽花に小さき蕾  
箱蒔きの夏野菜のつぎつぎと発芽に追はれ畑を耕す

近年は猛暑に負くるわが畑今年はどうなる長期予報は  
昨年の二倍の価格と連日に米の話題のテレビは尽きぬ  
少し安き備蓄米らしがネットにあり発送予定は一月も先  
七月に大災難が来るといふ噂のせるか米の不足は  
災難の噂もあるしとりあへず真空パックの米を備蓄す

吉田 綾子 ☆ 茨城

萌え盛る屋敷を囲む櫓、櫓紺青の空にひと日揺らぎぬ  
新緑のグラデーションに思い出づ「病が治る」と恩師のことば  
牡丹の花散りて芍薬咲き初むる義母の十三回忌間近なり  
屈みつつ芝生の草を手際よく抜きたい義母の姿偲ばる  
何事も「善し悪し」はつきり筋通す気丈な義母は明治の生れ  
朝々の義母の茶受けは梅干ひとつテレビは常々NHKなり  
我が腕に抱かれたるまま眠るごと逝きし義母の温み恋しき  
淡白な味を好みし義母の膳梨や蓮根とくに食せし  
戦争に苦勞せし義母は長寿なり百一歳で行年迎える

山口 嵩 福島

公園の斜面を駆ける児童らの背を押すごとく夕日射しくる  
児童らの駆けゆく先の東屋にアイスボックス今かと待てり  
寒暖差十度を超ゆる日のつづきコート抱へてアイスほほばる  
ピエロにも成りきれぬのかトランプ氏恥ぢらひもなく教皇演ず

外交もゲームのごとく仕立て上げ「非」は相手にと目を剥く道化  
トランプのデールに付度するあまり吞まされ事の多くなれば

橋本文子 鳥取

庭すみに赤い花かと近寄れば実生の南天双葉が育つ  
鉢に蒔き小松菜育て朝ごとの味噌汁に浮かす緑うれしく  
四月末キンカン色づき緑と黄ふくよかな木と空の明るし  
キンカンを剪定しながら採れたての甘味と酸味すぐに味わう  
室内でキンカン育て幾年か実はならないと信州の友  
川沿ひも道沿ひもつつじ花ざかり米子の五月明るく美し  
希望者につつじの苗を下さる市中心の温む企画よとはに  
一日に一リットルの水分摂り健康保てと日毎の注意

塩船観音

酒向陸 江☆東京

級友に誘われ五月の風仰ぎ塩船観音の躑躅見にゆく

茅葺の山門くぐれば見るからに古刹の寺院の並ぶ山道

大いなる船の形の盆地にて山一面に躑躅の花燃ゆ

満開の躑躅の間に間に小道あり花を愛でつつ縫うごとく登る

裏山に人気なけれど友の言う「地元だから」に迷わず付き行く

この頃はどこに行くにも運動靴スマホの歩数は一万三千歩

母の日にカーネーションの届きたり良き嫁よき子等ありがたきかな

太安万侶

天野克彦 大阪

安万侶の「銅板墓誌」を観んと来つ国宝（たから）となりたる安万侶の墓誌（京・文化博物館）

千三百年経たるこの「墓誌」目のあたり昂ぶるころ抑へがたしも

緑青の噴きたる「墓誌」に刻みある安万侶の文字尊かりけり

両側に迫れる山の中道をひとりゆくなり安万侶の墓所（大和・此瀬（このせ））

あまたたびこの山道を登りきて立ちたる吾を安万侶知るや

みみ痛きまでの静けさ今なほも茶山にねむる太安万侶

見の限り茶畑広がるこの山は平城官僚の墓域かも知れず

茶摘みには間のあるらしくひとりなればこころ安けく弁当ひらく

足利フラワーパーク

高松 美智子☆栃木

招待券をもらったからと誘われて初めて訪いたる藤の盛り

異国語があちこち飛び交う庭園にポーズを取る人車椅子の人

白藤の花は盛りに香は高し羽音せわしく蜂が寄りくる

腰ひくく身をよじらせたる太き幹四方に蔓を這わせて大藤

花房をゆたかに垂らす藤棚の足元に咲くルピナスのむらさき

珍しき八重藤の棚見上げては「ぶどうみたい」と口々に人は

さくら色が少し褪せいるうす紅藤花の盛りを十日ほど過ぎ

花時を少し違って咲き継げるうす紅むらさき白藤黄ばな

アカメヤナギの広き木陰に庇われて杖つく人がひととき憩う

高橋説子 栃木

無駄草の中の半夏生数本を親方は刈らず残し呉れたり

思ひきり親方は丈を伐り詰めぬ咲かず仕舞ひの金木犀を  
 チェーンソーに満天星は撫でられて姿勢正しく四角になりぬ  
 絵図描きて一から造りしわが庭を親方は子を見るごとく愛づ  
 今はなき渋谷公会堂に聴きし「題名のなき音楽会」の収録  
 矢車草二本見つたり庭隅のカラスノエンドウ蔓延る中に  
 刺繍糸の色見本帳、図案集、布も広げて居間はラボなり  
 目の前に広がりゐたる麦の穂のけふ音もなくわれも動かず  
 十三年乗りて車検も税金も負担になれどまだ手離せぬ

大塚 亮 子 東京

風吹きて庭に転がる青梅を箆に集めてキッチンに置く  
 康君と挽ぎたる青梅三十個足らず洗ひて拭きて箆に並べる  
 青梅を買ひ足し夏バテ防止にと梅ジュース今年も造らむと決む  
 植ゑくれし友思ひつつ花いかだ茶の湯の床に一つ挿したり  
 お隣さん越して幾年経つならむ思ひたる午後訃報を聞きぬ  
 雨戸開くことは最早無かりしと隣りの二階屋暫く見上ぐ  
 垣根越しに菜のやり取り世間話したる日常懐かしかりき  
 二人ともチビで塚原、大塚と名前似てをりよく間違はれたり

桜 嶋 田 正 之 埼玉

戦前に植ゑたる苗木季かさね樹皮黒々と道辺にうねる  
 開花日を知らせるニュース通り過ぎ何時しか人は暑さを嘆く

死にざまを散りゆく桜になぞらへて潔しとて若人死なせき  
 終戦を小一年に体験の証言者なりひもじき思ひ  
 鉄舟にゆかりの深き割烹に二十一人集ふともがら  
 あの時が最期と想ふ日とならむ令和七年四月十二日  
 紫蘭といふスナックに来て同窓の友等と歌ふ昭和期の歌  
 学舎の廃校話を聞きたれば危ふくなりぬ己が存在  
 これ程に桜讀へる民族の他に居りしや吾は知らざる

江波戸 愛 子☆ 埼玉

芍薬の荅三つと喜びておりしがふくらむ荅は二つ  
 ひじ掛けの窓の高さに伸びきたる芍薬にあなたは添え木をあてる  
 伸び来たる茎の先端シャクヤクのふくらむ荅をあなたと見ている  
 芍薬の荅見ながら久しぶり二人の会話とぎれずにいる  
 ヘルニアの痛み治まり明日からはラジオ体操始めるといふ  
 公園の清掃日なり花おえし蒲公英の根を抜くをためらう  
 公園の砂場の上の藤棚に今年は八重の花ひらきたり  
 ばっさりと枝をきりたる金柑を二回りして揚羽蝶去る  
 歌一首考えていて味噌汁を煮つめてしまったことなど言わず

稲 田 正 康 東京

女性上位のかたちに見ゆる雛ひと組壁を飾りて三月となる  
 おほひ立つ枝に若芽のひろがりぬ梢になほも花を保ちて

壁の金太鯉にまたがりここにもまさかり担ぐ五月未だし  
道のべに立つ沈丁花ひとむらのおほかた過ぎつかをり残して  
五月連休羽田カウンター新幹線フォームニュースに映ることの当然  
園地中央立つ高き木に若葉もえその円錐のかたちととのふ  
むかひ席七人のうち六人がスマホ見てをり一人は連れにて  
「根比べ」はラテン語といひ百余人投票重ね教皇えらぶ

橘 美千代 新潟

あたたかき雨にうるほひ開きそむ花みづき今朝はうす緑色  
朝より開花のすすむ花水木うす緑からしだいに白へ

ひとけなき水曜午後の公園はカラスとわれのみ木の間がぐれに  
カラス二羽近くおりきて目のまへを歩むはわれの弁当めあて  
真鯉につづき緋鯉のおよぐ池の面に枝垂るる梅の影をおとせり  
スーパーに買ひたる菜の花可憐さに食べるをやめてボウルに生けぬ  
早朝にパトカー駆くるわが家近く豊浦周囲に熊あらはると(ツキノワグマ出現)  
赤谷より川伝ひにきて市街地に入りたる熊か姿くります  
この闇のどこかに熊の潜めるか窓の外へ猫が目をこらしめる

ブレイクあずさ☆ カナダ

広き背に桜の花びら積もらせてホーン高らかゴミ収集車  
冬越しのタイムに小さきうす紅の花開き今朝小さき蜂呼ぶ  
土を踏み草かき分けて帰宅する猫の土産はオゾンのにおい

てきばきと無駄なくミスなくレジを打つ人はたいがい中国系なり  
計算は正しくてやや無愛想ペルシャ語訛りの美女レジを打つ  
多すぎる釣銭よこし「とつときな」片目をつむるイタリア系おり  
「こんにちは」機嫌いかが「きまり文句告げばうつつすらレジの人笑む (Hello, how are you?)  
カナダ雁が白頭鷺を追い散らす動画の上がる昨日も今日も  
遅き春光を求めて背伸びするひまわりの苗ウクライナという

田 端 五百子 岩手

鍼灸の技にドジャース応援すと青年被災せる町を発ち行く  
後輩の朗希に会ふも楽しみと鍼灸の人より便りありしとふ  
被災せる町にも春の千花咲き炭と化す樹の間を浦風通る  
鶯の声ととのひて二声三声四方の山並み緑の照りぬ  
主あらぬ庭にも春の花咲きてかしぐ表札雨に濡れぬる  
捨ておきしプランターの中紫蘇の葉の出で来て今朝は納豆巻きに  
また一人同級生が逝きたるを新聞に知る白露の朝に

中 村 哲 也 宮城

明日向かふ北海道の天気予報気温の低さに冬服詰める  
仙台は葉桜なれど北海道そもそも開花も未だとぞ聞く  
空港に近く温泉湧く宿で入らずに寝ぬる明日早ければ  
機上より眺める青空その下の分厚き雲は雨降らすなり  
窓側の席に座るも機上より下の眺めは雲ばかりなる

札幌でおほかた降りる小樽行き替はりに外つ国人等乗りゐる  
海岸に寄せる白波岩の上に海鷗群れをり身じろぎもせず

山 本 三 男 ☆ 群馬

スーパーの裏手の道に人を見ず矢車草が今盛りなり  
秩父路をドライブに来て妻のため「栗助」という和菓子屋に寄る  
道の辺にクズのツル伸び川に居し鴨の姿は見えなくなりぬ  
まだ妻に言わねばならぬことあれど先延ばししてひと日過ぎたり  
母と祖父の言い争うを聞きし日のわが幼少の記憶は残る  
病院の待合室より電車見ゆ三度目に来て今日氣付きたり  
病院にコンビニあるを知りたればおにぎり一つ試みに買う  
手術など心配いらぬと言う人はわれの家庭の事情を知らず

姉 川 素枝子 福岡

嫁とわれ同じ干支にて息子辰牛年の孫とほくに住めり  
子の若さ盗みをらむか指にてそつと触りぬ弛む目ぶくろ  
名のみ知るいきなり饅頭いただきて動転してゐる老いの腸  
吾に来る人は聞き役に耐へてゐむ説明調になる癖あれば  
聞き役に耐へたる人が帰り際まだ惚けないなといふことを言ふ  
杉花粉多いといへる真昼間に垂る鼻水は水のごとしも  
曇り日に枝をひろぐる大櫓あやまちのごとけむる紫  
細き枝空を覆へる下をゆく如月つきるぬくき昼すぎ

如月膳くる日と待てる夕べにて鱈のお造り装ふ三切れ

井 上 菅 子 山形

ふるさと納税返礼品のほつけ焼き一人で祝ふ今日生誕日  
藪の中に白梅咲けりかつてここに豊かな人の暮しがありき  
袴の痕赤く茹でたるつくしんぼ卵に綴ぢむかごまに和へむか  
過ぎ来しもいま在ることもおぼろげに万朶の桜輪を描く鳶  
北国に棕櫚の葉そよぎ南国の風を恋ひつつ季はまた巡る  
夕風に吹かれて倒れまた起きる白山吹は花零しつつ  
消しゴムでやさしく消して誤字正す余裕ある日は心も柔く  
外側より崩す渦巻真昼間のロールケーキこはれておしまひ  
兄嫁の三回忌兄の百箇日みんなみんな遠くなる春

井 上 楨 子 新潟

わが庭の桜の老木枝長く僅かなる花先端に咲く  
暴風雨去りて小暗き境内の見覚えのなき落葉を片す  
裏年とふ知れど殊更この年の筍小さく錆色に固まる  
手伝ひの媼の症状驚癡にてホスピスの階に移るに驚く  
ホスピスの階の媼を訪ひをれば知人の僧が礼拝堂に座す  
暇みては奉仕に通ふと若き僧ホスピス病棟に車椅子押す  
平均が二か月ほどの命とぞ病棟の職員静かに話す  
壮年の子の振舞ひに愚かなるわが所作みえて心納むる

近くのさくら

大山 敏 夫 埼玉

歪みたる古きわが身もゆるみきて桜の咲きぬ近くのさくら  
花見ればどこか何かのほぐれゆく感じのしきり躰の軽く  
花冷えの去りてほのぼのるゆふべ浮かれ桜とうたふこゑあり  
下に来てけふも見あぐる太き幹さくらの花の盛りは近く  
もうだめとおもふことなど牛の肉焼きてたうぶるうちにうすらぐ  
冷酒より熱燗ほしくおもひゐるころを満たす夜などなきか  
男結び女結びに綾結びおもひゑがきて酒ワンカップ  
ポトマックの盛りは過ぎて遅咲きのカンザン開くワシントン市街  
そんなにも頑張らなくて良いと思ひ拳を握る映像を消す

## 花の宴

大山敏夫

花の宴荒城の月口ずさみけふは渉る「冬雷」の組版  
歌会にもBGMをつかふなら荒城の月ゆるく静かに  
過去回想の助動詞的確につかはれて土井晚翠の詩が薫るなり  
DTP組版を我流に重ね来て二十年いまだほんの素人  
七五調定型詩ふうの沁みわたり抒情叙情の組版作業  
職業として組版をせしわれの五年間とほき活版時代  
シャツトダウンし眼鏡を外し立ち上がるもう眠らねばならぬ時来て

## 五月号冬雷集評

山本 三男

朝五時に新聞配達のアートバイの音して一瞬道は明るし 兼目 久  
朝の五時のまだ暗い時間に新聞を配達するアートバイは毎朝やって来るのでしょう。そのアートバイの一瞬のライトの明るさを捉えた見事な作品です。  
紙に巻き仕舞ひ置きたる雛の顔の紙取り除く祖母との思ひ出 山崎英子  
雛人形を大切にしておいた様子がよく分かる歌です。雛人形の顔立ちは昔風の素朴な顔立ちをしていたものと想像しました。その顔は御祖母様に対する記憶に通じるものなのでしょう。

この雨を待っていたのか庭の花頭を持ち上ぐクリスマスローズ 酒向陸江☆  
今年の冬は雨の降らない日が続きましたが、久しぶりの雨に息を吹き返すクリスマスローズの花茎を伸ばす様子が目に浮かびます。庭の花が雨を待ち望んでいたかのように見る作者の思いがよく表現

されています。

わが窓ゆ眺むる山の大方は見尽くしたれど飽くることなし 天野克彦  
ご自宅の窓から山が見えるのは羨ましい環境です。毎日見える山の姿はともすれば飽きてしまいそうですが、「飽くることなし」と結んだ作者の感性に非凡なものを感じます。

十ヶ月手入れ怠るわが庭の水仙の花芽一つだに無し 大塚亮子  
水仙は丈夫な植物ですが、葉が枯れた後に球根を掘り上げないと花が咲かないことがあるようです。そのことは解かっていても、つい手入れを怠ってしまうのは筆者も同じで共感しました。

ラーメンと餃子の旨い店見つけ時折独りの昼食とする 嶋田正之  
のびのびとした表現に、おいしいものを食べる喜びが伝わってきます。このような食事は時折なのが、よいのでしょうか。この歌を読んでラーメンが食べたくなりました。

十五日朝から夫は嬉しそう孫に小遣い

渡すと言いて

江波戸愛子☆

十五日はどんな意味があるのでしょうか。筆者の推定では年金支給日ではないかと思えます。お孫さんの喜ぶ顔を想像しているご伴侶の嬉しそうな姿が詠まれています。家族愛が感じられます。

母にはひ孫われには孫の誕生を待つは希望よ未来みつめて 橘 美千代  
お孫さんの誕生を希望を持って待ち望んでいる様子がよく分かる歌です。お母さんにとってはひ孫、作者にとっては孫という当たり前のことを敢えて歌ったことに、受け継がれていく家族の絆を感じます。下の句の肯定的な表現は、この作者が豊かな人生を歩んできた経験から出たものなのでしょう。

目交ひに来たる亡き人 在る人と話しつつゐて眠りてをりぬ 姉川素枝子  
現実と異なる世界に引き込まれるような歌です。結句で夢を見ていることを暗示していますが、単なる夢の世界ではなく作者の胸に去来する過去の記憶がこのような歌になったのでしょうか。

## 大友柳太朗と美空ひばり②

—その短歌と情—

大山敏夫



『大友柳太朗快伝』表紙

『昭和万葉集』（全20巻別巻1 一九七九年講談社刊）に載る大友柳太朗作品を調べた。『大友柳太朗快伝』に編まれた年譜には「昭和万葉集巻四」に自作集「渚」から四首選ばれ掲載されることになる。見るとその第Ⅲ章の204ページ「仕事の歌」の項目の中に見つかった。

幾山河へだてて住めどあたたかきその御情は胸に通ひ来  
うちつづく徹夜のセット出で来れば目に沁み渡る五月晴  
れかな

スクリーンに動く貧しき吾が姿じつと目をとち息をこらすも

この秋をめづる心の湧く間なく起きて働きつかれてぬむる

すべて昭和十二年の作品である。本稿①であげた戦地での塹壕掘りの歌、帰還艦での感動を歌ったものは、『大友柳太

朗快伝』を編集し刊行した「友の会」の保管する中の作品となる。『昭和万葉集』掲載の一首目は、映画界に移ってから恩師の辰巳柳太郎を慕い敬う作品であり、類似するものももう一つあるので次に載せる。

たくまじきその御顔とあたたかきその御心と高き芸術と  
他の三首については先に述べた通りである。

『昭和万葉集』は一般応募作品枠と専門歌人の作品枠があるが、他に編集部に於いて調査して集めた作品もあったのかと思う。大友作品は「選ばれた」とあるので、編集部が採して作者に掲載許可を取った作品なのかなと思われる。

歌集『渚』は、昭和十四年に、仕事に追いまくられて働いている中で胃炎を悪化させた胃潰瘍で入院した時に、療養中のベッドの上で纏め上げたもので、「病床日記」（大友柳太朗快伝「所収」に、そのあたりのことを記す。

病床ベッドに寝たまま時折詠んだ常日頃好きでやっていた歌の上に、新国劇時代から作りためてある歌を加えて二百首ばかり、自分の好きなものばかりをえらんで、東西の後援会有志の肝入りで、一冊の本にまとめて出版していただく事になる。

その外原稿用紙にして百八十枚寝ながら考え、そばで筆記してもらった私のシナリオ「卯之助帰る」がやっと

出来る。仕事好きの僕が、仕事の出来ない病中に、せめても仕事に対する愛情と鬱憤を晴らし得たのはこの二つだ。そのうちに世の人々のお目にふれる時が来れば大変うれしいと思う。

この入院中のベッドの上でも作歌して、それも加えて作りためておいた歌を一冊にまとめたと言う。それ以外にもシナリオを一つ書き上げたようである。

大友柳太朗は進学して将来は国語の教師になるという希望を抱いていたが、家の経済的事情から断念し、松山中学を卒業すると大阪の姉を頼って上阪し齒ブラシの行商をしながら俳優を目指していた。そして辰巳柳太郎に巡り会い弟子入りして新国劇の初舞台を踏む。年譜には「その後六年間、大阪、東京、地方巡業と修業の時を過ごす」とある。そういう中で気が動けば歌を作り、時間を見てはその推敲などをして記録しておいたであろう。さらにシナリオ作家も目指していたとの背景も解る。

シナリオ作家を目指していたとなると、当時の専門雑誌「大衆文芸」の読者であったかもしれない。第三次ともいえる「大衆文芸」は、この昭和十四年に島源四郎によって復刊され長谷川伸が主宰者だったようだ。「大衆文芸」掲載の中から直木賞作家は多く選ばれている。

「笛吹童子」（萩原遼監督）に続く同監督作品映画「紅孔雀」

で大友柳太朗の演じたのが△五升酒の猩猩▽である。名の通り、大酒かつくらつての豪傑だが、腰にはいつも竹光、戦う時は手近の棒切れで間に合わす。その凄さは霧の小次郎の上を行った。例えば主役の那智の小四郎（中村錦之助の前では、何と石の大鉢を竹光で真つ二つにしてみせ「心眼を鍛えておけ。心で斬るのだ」と言い、暗い宿命を嘆く盲目の美剣士浮寝丸（東千代之介）には、「宿命などというのは心の弱い人間どもの世迷い事だ！ その心構えでどうともなるもの。素直なる心ほど、乱れやすい」と諭す。「忍術関ヶ原 猿飛佐助」（森一生監督）や「真田十勇士」（河野寿一監督）等を演じた経験が、霧の小次郎や五升酒の猩猩というキャラを独自の形で演じ得たということもあるのか。

実際に大友柳太朗は酒豪だったと云われている。それは吞めない師匠のお供をしての宴席で、師匠の代わりに貰った盃を失礼にならないように片っ端から吞む役目があった。言わば生活感濃く漂う中で、おのずから鍛えられた。

短歌の中においての酒を飲む歌の方はどうか。

たち出づる朝を家の父と酌む酒のにがさよ胸に沁み入る  
いっしかに酒など飲みて汽車にのるはかなき性質よ旅になれつ、

酔ふにつれて人と同じく歌唄ふ明るきさがを星と思へど

父と飲む苦い酒。△孫がもう欲しとのたまふみことばを切なくききて巡業に出づるも△もあるが、背負わされている大きな期待があった。大友柳太朗は本名中富正三で、三人の姉の下に生まれた初の男子であり、父の代で傾いた家の再興を一身に背負っていた。中富家は古くからの大変な家柄で、家系図は中臣鎌足に繋がると云われている。それが幼時より生活苦の実態を身をもって被っており、小学校での記録には、「学業成績は三年間通して全甲、学校始まって以来の秀才」とあるが「性格は暗く寡黙」と記されているという。

進学を断念し、役者、俳優の道を目指す、古い日本の社会では「河原乞食」と蔑まれる差別の対象でもあった世界なので、中富家の親族からも批判されることが多かった。まして日の当たらぬ修業時代なら一層厳しく、大友の悩みは絶えず、暗く寡黙と云われた性分にも囚われがちだったことだろう。その巡業の時でも汽車に乗れば先ず一杯となる。酔いが増せば歌い出す明るさもあるが、それを自らの持つて生まれた「星」と思いつつ、大友は反省しきり。

誰一人語る人なし寂しさのやらんかたなし灯を消してねん  
苦しめよ苦しめよとてこの日まで生きて耐へて来し吾れ  
なりし哉

愚かなる毀譽褒貶にまかれじと大地に足を踏みしめて立つ  
人みな希ひなれども吾れもまた悔いを残さぬ生活をし

とも手に入れてしまっていたのである。その方が驚きであった。また、柳太朗が歌集を長谷川伸宛に寄贈していたことが判明したのも貴重な情報だ。

『モダニズム出版社の探検 余話』に収録された△大友柳太朗の歌集『渚』を読む△は四六判書籍20ページにわたる量の論であった。当然わたしの知らなかった情報も作品も多く引用されていて、資料にも刺激にもなった。高橋氏は、大手出版社で長年腕を振るった後に、フリー編集者となって「地味な古本エッセイ集や本に関するアンソロジーなどを出版した」と「著者略伝」にある。

『モダニズム出版社の探検 余話』の中で抜かれている作品は、歌集掲載の形のままの二行である。ここでの引用でも高橋氏の記された通りにすることにした。歌集『渚』は、表紙は白地に周りを朱でラフに囲んだ上部中心に、墨の表題と、下には横組みで「大友柳太郎歌集」とあるシンブルなもの。八十八頁の薄い本である。

本文の短歌の方はテーマ別に、「その昔」「ははそば」「旅心」「京洛」「その折々」の五部に分かれている。という（この時点では柳太郎だった）。さらに、

「ざっと通読したので、素人なりに気に入った歌を順々に列挙しておこう」として、

○岡崎はさびしき町ぞ時雨して  
千秋楽の旗うちぬれつ

たし

超然と群を離れて輝ける北斗の如く吾れも生きたし

日々は修行のような在り方、中富家再興の重荷もあり、己を鞭打ち叱咤する。しかし、そこはかとない希望もころごしも忘れない。つくづく真面目な人だったなあと思わせる。

高橋輝次著『モダニズム出版社の探検 余話』（二〇二四年刊）なる書には、△大友柳太朗の歌集『渚』を読む△という論が載っている。わたし以外に大友短歌に興味を持つ人が居たことが嬉しかった。

この人は大友柳太朗の歌集『渚』を二冊所有していると言う。古本屋さんを見て回るのが好きで一冊目はたまたま店頭に残った物の中から見つけたらしい。二年前とあるのでごく最近の話だ。しかも値段が二千元と言うから嘘みたい。そして二冊目は、その約一年後に開催された「本の散歩展」の目録の最初の店の出品にあったと言う。

こちらは「長谷川伸宛のペン献呈署名人」で五万円の値がついていた。「これほど高値とは！」って思ったが長谷川伸宛というのだからと購入したとあった。わたしは昭和十四年に後援会が作った非売品の小歌集が、今ごろそこいらに散らばっている筈がないと思ひ込んでいたが、この話によればこの三、四年のうちに貴重な二冊が出てきて、この人が二冊

○旅に病むこのあきなれや枕べに  
四つ五つの散れる枕褥眺めをり

○この三年舞台に死にて味気なく

客の喚呼をきゝて暮せり

○絃の切れし三味ならず如きうつろさを  
今日も抱きて化粧にかかれり

○死ぬまでに一度逢はんと手をととりて  
雪の夜更けに別れし人よ

○腹へればトマトを喰ひて詩をかきし  
二十歳の頃のなつかしき哉

○秋の夜の野風呂に父の背を流し  
流しつつ聴くその昔のこと

七首を挙げる。取りあげた作品から、「仕事での旅のことを歌っているので、映画俳優になつてからも、しばらくは新国劇の地方巡業も続けていたのだろう」と高橋氏は推測する。

巡業の張りの少ない日の続いた様子がうかがえ、脇役が多くて舞台前の化粧にもいまいち気が入らない。修業時代の薄給では食事さえ満足には取れず、それを知る師匠の辰巳が意識的に残してくれる食事を貰い凌いだり、仕事の世話になり、舞台での失敗も庇い助けてもらう日々で、年齢七つしか違わない師弟関係の二人ながら、生涯にわたりこの恩を忘れず、辰巳の前では決して膝を崩すことがなかったという。短歌にも演劇にも、一貫する大友柳太朗の人柄なのである。（続）

# 作品一

桜井 美保子 神奈川

蒸し暑さ続きで夏の寝具だす五月半ばにもうつかふとは  
曇りから雨になる日の多くなり道に勢ふどくだみの花  
集会所のそばの植木に絡みたる忍冬の花つるごと抜かれつ  
冬越して窓外に出す月下美人シュートの伸びて新芽あちこち  
磯子駅のホーム一つだけにして簡素なるさまに十年親しむ  
線路ぎはの塀の茂みに昼顔のいくつも揺れて日差しじりじり  
クリーニングの受け渡しアプリに変わったり便利さあれど物足りなさも  
優雅なる茶のひとときを夢みるや英国映画の紅茶とケーキ  
教科書の「舞姫」声に読みくれし長女との時間 記憶のかから

正田 フミエ☆ 栃木

小振りなれど春大根の収穫す防寒仕様の三重はずす  
朝くれば野菜の苗に水やりを時に活力液肥をかける  
トマト苗の鉢から根の伸び三度目の鉢増しをして花芽を待ちぬ  
トマト苗に黄の花咲けば定植の準備に掛かる晴れ晴れとして  
育苗の期間は天気は敏感なり気温の変化ノートに記す

飯塚 澄子 東京

仕事修め古稀に近づく息子なり泰山木の落葉拾ふは  
泰山木の大きな葉の庭に落つ塀の内外目につく卯月  
見上ぐれば泰山木の葉の茂み光り輝く黄金の葉多々  
紫木蓮弥生の末に花散りて雌しべの脇に二つ小葉置く  
枝に残る雌しべの脇の葉の生ひて卯月に育つ紫木蓮なり  
紫木蓮新しき葉の成長し葉の透き間より庭の空見す  
亡き夫の椿好みか幾種もの椿の花の庭を彩る  
折々に庭の手入れをする嫁よ花の名も詳し有難きかな

斉藤 トミ子☆ 栃木

低く咲く春蘭の花山道に朝日を受けて輝きており  
土筆萌え大犬のふぐり藤袴咲き初めにけり我れは何せむ  
河津桜枝いっぱい咲きており去年ことごとく切り詰めた木に  
切る馬鹿と言わるる桜切り詰めて心待ちおり今年の桜  
花を摘み冠作りて遊びいしれんげ畑はメルヘンの世界  
片栗の魅惑の誘い静かなる山道今日は賑わいており(三轟山)  
山椒と思い摘みたる犬山椒あの香のあらず只青臭き  
セーターをリメイクしての猫帽子我れには出来ぬ友の器用さ

高橋 燿子☆ 埼玉

金毛九尾の狐狩りに弓落とし夕狩の村名那須の地にあり

先生に学ぶ歴史は逃室<sup>にがしむろ</sup>も金毛九尾を逃がした故と

殺生石に行くたびに挿絵に在りたる玉藻の前が浮かび来る  
あれこれと夢を追いたる頃もあり健康のみを願う現在  
誘われるように桜の花による人の多さよ蝶も舞いきて  
花見席歩き始めの幼子は間合い図るか仁王立ちして  
好物を前に笑顔の子等夫「家はいいなあ」退院祝う  
心臓の手術リハビリに十キロ減らし八十六歳目指す夫

浜 田 はるみ ☆ 埼玉

思い切り花の多いこの季節色があふれて心浮き立つ

朝は雨午前中には雪になり正午過ぎには陽がさしてきた

今迄の三寒四温崩れきて天候不順予想が出来ぬ

忙しくやりたい事ができぬまま縛られていた頃の尊さ

思うのは四十代五十代頭も体も自由に使えた

自分の体の心配だけなのに視力低下が意欲減退に

高齢者の運転事故が無くならぬ不安な自覚前からあるはず

この春は長野で桜を眺めけりコヒガンザクラやシダレザクラを

野 崎 礼 子 ☆ 埼玉

師を前に緊張したる川越歌会白熱の評とても刺激的

暖かく楽しい会にしましょうと安川さん笑顔で空気が和ます

美空ひばり好きだと話す大山先生身を乗り出して意外と陽気

二ヶ月は歌を寝かせると嶋田さん必須の作業我は苦手なり

この我が一番若いと言われたり歌会のみんな感性豊か

歌会終え熱気冷めず二次会へまるで旧知のように盛り上がる

二駅を講座に向かう五十分短歌三首頭に浮かぶ

浮かび来る歌を書きとめ一週間パズルのように組み立ててゆく

岩 渕 綾 子 岩手

垂れ桜ベランダ前に満開ぞ競ふがごとく山桜咲く

沈みゆく吾が心をば興さむと子らはスマホで気遣ひくるる

気をひき締めデイケアに来れば胡蝶蘭に紫陽花われを迎へくれたり

年重ね気力が失せていかにせむ親しき友等は鬼籍に入りぬ

垂れ桜風雨にさらされ痛いたし生ある物の哀れを見たり

「樹冠火災」自衛隊に消防士さん危険厭はず感謝は尽きず

突然に山林火災に襲はれたる人にも何時しか春が来るらむ

田 中 祐 子 ☆ 埼玉

後手に玄関の戸を閉じながら客はわが絵を爽やかと笑む

遙かなる介護の隙間に描きたる子等の肖像欲目混ざりて

久びさの少年寡黙の頬緩めケーキ三個をすみやかに食べる

学舎と自宅の距離の遠からず時間の余裕にテニスを語る

枯れたると心配したる白梅の枝葉芽吹きて安堵に仰ぐ

苗木にて次男の植えたる白梅の十五の春や愛おしき日々

フリージアの古き球根そこなわず四年目の春を香り高く咲く  
ミナさんの「がんばろうね」の声嬉し義妹とわたしの合言葉なり

倉浪 ゆみ 埼玉

タンポポに菜の花、ミモザ、連げうと黄のくさぐさで春は明るむ  
羅漢様さくら花びら身につけて春の面して座しておはします  
ああ何と我はしあはせ憧れのさくらを追って逢ひに行きたり  
妹らと見あぐる堤の桜花かぜに吹かれて舞ふ花びらは  
さくら花こたく散りて花筏ゆつたり流るる川面みてゐる  
千葉に住む妹よりの宅急便あければ仄かに汐の香のして  
恥づかしげにスーツを着たる若き人多く見かけるけふから卯月  
園庭をゆつたり泳ぐ鯉のぼり母さんの歌がきこえるなり

林 美智子☆ 東京

赤松の松の芽摘みは松の香の清かな五月初めの手仕事  
樹齢はや七十年の赤松は二階の息子のペランダに広がる  
ペランダから手の届くところが我が範圍松の芽摘めば無心の境地に  
日曜日疲労ぎみなる娘来て松の香に浸れば治ると手伝う  
大き芽をまずは摘み取り大瓶に松酒を作る楽しみもあり  
心地良き松風に浸る 亡き嫁の愛した木作りの広きペランダ  
飯嶋 久 子☆ 茨城  
ネモフィラと魚市場へと続く道青信号にても車動かず

重き野菜果物などリュックにつめ遠足気分で楽しみ帰る  
農道にまずは大いぬのふぐり可憐なる花びら青くひらく  
大いぬのふぐり「星の瞳」とも言うを知り何やら心休む思いす  
枯れ田には小川の水を引き入れて夜にはたちまち水田となる  
まんまんと水たたえたる夜の田は月をうつして静もりて居り  
百五十年分の同窓会名簿届きたりずしりと重き歴史のありて  
睦みいしあの人かの人鬼籍なり卒寿近き身せんなきことか嗚呼

松 中 賀 代☆ 高知

アマリリス蕾と判る太い茎大きい花を掲げる準備  
初夏告げる鳶尾の花射干の花姑が手植えの花を受け継ぐ  
柔らかなブドウの新芽を守るべく風除けをする支柱に添わし  
棒状の一本の木に芽吹きいるブドウの蔓が棚を覆う夢  
少しずつ伸びゆく日差し少しずつブドウの新芽新葉に育つ  
又来てる野良の子猫が我が畑に落とし物して土をかぶせる  
駅前自転車置場を通る時挨拶するも無口なる人  
長ぐつを履いて小花に水をやる二歳になつてお口も達者

本 郷 歌 子☆ 栃木

新しきポスター一枚加わりて壁はブレックスの選手で埋まる  
騒めきつつ次第に席は埋まりゆくバスケの試合の二時間前に  
下腹に力を込めて声を出すアリーナに響き渡るファンの声援

歓声でアリーナ揺れるバスケットのシーズン最後のゲームの勝利  
エコ補助金下りると判りてVサイン冷蔵庫エアコンと継ぎ継ぎ壊れて  
不作だとニュースに聞いて諒解すこの春に筍一本も届かず  
救急車のサイレンに車を片寄せる心に祈る無事であれかし  
下草に葎たんぽぽ菜の花と春詰め込んで桜の並木

村上 美江 岩手

うぐひすの上達したる歌を聞くこの恋きつときつと成就す  
油揚げ人参椎茸しやうゆ味義母のお蒸かし もう食べられぬ  
情熱の郷土の歌人「霊峰」の師と仰ぐ「白蓮」の軸間近に迫る

「風恋橋」赤い欄干背景に手を取り合ひて歌の仲間と

震災で家が流され主なき庭先に真白なる水仙の咲く

合歓木の葉は就眠運動し淡紅色の花はおしやべりをする

一日に十万回も働いて文句も言はず吾の心臓

伊澤 直子 ☆ 東京

毎年に新宿御苑の桜花歴史に見ゆる八重咲「一葉」

青もみじ今だけの色楽しみに御苑の花を見ながら目ざす（御苑のもみじ山）

もみじ山ベンチのおにぎり弁当に緑を抜け来る風は清しく

東京都美術館まで新緑の輝くを眺めうきうき歩く

ミロの絵に描かるるモチーフ奔放で色彩豊かに楽しさ誘う

相国寺展「雪舟応挙若冲へ」に誘われ芸大美術館に行く

華やかな色彩のない若冲の墨色襖絵深く見入れり

連休に孫らと会食できたらと予定を合わせてお好み焼きに

乾 義江 ☆ 茨城

細き幹十センチ程の草でさえ花を咲かせて春を寿ぐ

土や黄砂衣は竿に翻る煩わしきかな春荒れの風

片付けし道具取り出しセーター編む済めば又もや病みつきになる

ジョイフルの編物コーナー糸不足入荷の兆し無きと店員

洪々と医師の進める定期検査は結果良好ぼっくり逝きたし

映像のアメリカに数多日本米五キロ二千円で売買の不思議

落命数多ウクライナやガザの子供達何時まで続くこの戦いは

楽しみし緑のひこばえ畑中の寸時に鋤かれ趣かわる

永光 徳子 ☆ 東京

庭先の菖蒲刈り取り菖蒲湯にゆったり浸れば青き香の満つ

梅の木の下の子ととりしておれば薫風我が背に青梅落とす

雑草に足とられつつ庭歩く露草の藍静寂を呼ぶ

年々に赤白並び咲き誇る芍薬今年は白しか咲かぬ

芍薬は亡夫の植えし花なりき赤白咲くを常と思えど

耀き捧ぐ 松本 英夫 東京

野いちごは冬ぞ勢ひまさりける青葉いきいき赤き実たわわ  
今年またあらがひがたく梅ひらき桜ちりゆき雪やなぎ白し

露地行けば自づと知らるるこの香り垣根の向かうにジャスミンさそふ  
 白き房あまた連なる小手毬は連獅子のごと風に舞ひをり  
 数百の白き花房あさ日受けニセアカシアは耀き捧ぐ  
 見上ぐれば白き花ぶさ満ちみちてかをりを降らし針槐たつ  
 ヒビスカス今朝は四輪咲き揃ふ残る蕾の数を確かむ

野牡丹の花みづみづし落ちてなほ朝日を受けて紫紺にかがやく

稲津孝子 福岡

暑さ過ぎ牛の体力回復しまた宅配の始まる牛乳

百貨店の壁に一九七〇年万博の幟たれぬき長女生まれき

歌の控へに夫の子らに描きやりし猫は尾を立て蹲りをり

雨戸の前の山茶花ひとつ蕾つき朝に開きて冬になりたり

太宰府の飛梅一月ほど遅く首の痛みの続く如月

浮腫みたるわが両足を膝に乗せ娘は揉みて帰りてゆけり

人をらず照明おとす通路ゆく寂しきものぞ病院の夜

庭の道場に稽古に來たるひと写し送りくれたる夜の白梅

この年も咲きてゐるらむ同期の旅の記念に吉野に植ゑにし櫻

戸部田 とくえ 福岡

木蓮に止まるひよどりを窓に見て暖かくなるよ小声で言へり

花の名を思ひ出せず図鑑にて確かめおちつく庭に咲くシャガ

竹の子の不作のニュースに氣落ちせり言葉にならぬ身にしむる味覚

育てたる葉ものに花の咲きくれば一輪挿しに日毎いとしむ

奈良公園あしびの花の愛らしくふれて親しむしみじみと

小雨降る芝生に寝そべる鹿の群れ見つめられつつ側を歩けり

吉野山子に連れられて坂の道とどまり見渡す念願のさくら

夢かなふ吉野のさくら見渡しつつ今を盛りの日和にめぐまれ

終点の吉野を告げるアナウンス夢心地せり信じがたく

大塚 照美 兵庫

週一度の朝刊に載るクロス・ワードパズルに坐る片付けはあと

置き忘れて帰れる孫のハンバーガー馳走になります何年振りに

窓越しの稲妻のあと数秒後に轟く春雷みみを塞ぐも

剣道着の中一の孫の写真みつ凛々しき姿こゑきこゆるやうな

米不足ゆゑの高値の米を買ふ備蓄米とふ米の混るや

堀の上にわが庭めざす猫のみて怯まず進むわが通り道と

母みづから咲かせしぼたんの季節にて仏前に供ふ六十年忌

わが庭に仰ぐ天文学館の位置を縦断す明石の子午線

吉村 昌子 千葉

近く見ゆる那須連峰の頂上に五月といふにまだ雪が乗る

白河へ行く道にある甲子かしトンネル四千五百米といふ長さ

十五年振りの帰国でその母と再開したのが最後の別れと

野口英世の生家の「いろいろ」と記念館幼き頃に読みし本思ふ

野口英世の生家の「いろり」の前に来てしばしたたずみ思ひをはせる  
五十年前に勤務で住みしころ牡丹園は皆の遊び場  
五十年前はみんなの散歩コース入園料など取らなかつたに

三好規子 福岡

結婚のため誂へし子の和服しつけ付くまま筆筈に二十年  
訪問着つけ下げ小紋を一度も着ずに娘は孫のため干す  
すべて我が見立て買ひにし着物なり柄も覚えなく初に見るやう  
横浜にて増えたる品をダンボールに詰めゆく骨折に用心しつ  
富士の見え鶯の啼き川に鶯翡翠のゐるこの地と別る  
もうこれで最後の景色と佇みて目に収めをり横浜の街  
娘一家が横浜より福岡の施設まで我に付き添ひ呉れつ  
十二年間むすめ家族と暮らししは神の恵みと感謝して去らむ  
福岡の長男夫婦は家具並べ荷解きをして我を待ち呉る

須藤紀子 埼玉

鯉のぼり上ぐる家あり苗代をうるほす流れゆるやかにして  
曇り日を間遠に花火聞こえ来る無名戦士の祭か今日は  
戦死者に敵も味方もなしと言ふ人等を戦に駆り立つるなかれ  
犬をらず一人行くだ草生ひて沢にこごみの時は過ぎたり  
犬の骨少し入りたるキーホルダー持ちて歩けば鶯の鳴く  
生まれ変はるなら何になるかと犬に問ひ我は鳶にと空仰ぎをり

目の見えぬ犬が齧りし吾が指の傷跡薄れぬ死にてひと月  
先代の犬を根元に埋めてより二十余年過ぎ椿は咲き継ぐ

佐藤靖子 東京

古タオルウエスにせむと洗へるをまた使ひをりなになじみて  
うづたかく積む八重桜たそがれの道にほのかな灯りとなりぬ  
この年のそら豆を買ふ『そら豆の煮えるまで』きつと思ひ出でつ  
種のみペン草がしかばねに見えて立ちをり白き日のなか  
世の氣候かはりはじめのころ逝きし恩人おもふは晴れ曇りの日  
もしわれの死顔が変なら直してよかたまらぬうち子よ頼んだよ  
鼻といふ文字のみむづかし顔のなか訳はおまかせウィキペディアに  
棒コーヒー指輪菓子など楽しかる韓国北鮮それぞれの言葉

鈴木計子 東京

飾らるる雛めぐる町うがちたる大きな石の雛置く石屋は  
押してゆくわれを自転車ごと飛ばすほどの風の中を帰りぬ  
葉の少し出でたる梅の隣りにて蕾を開きはじむ桜は  
夏日なる陽気に開きたる桜にけふは真冬の気温の雨降る  
ゆく道の桜にしばし足とめぬ枝垂るるさまにやはり惹かれて  
足漕ぎのスワンボートの数多をり桜咲きゐる公園の池  
桜咲く池のめぐりに隙間なくシート広げて賑はふ人ら  
花びらの散り敷く桜の下をゆく昭和の産のわれと自転車

色づきて広場に実る夏みかんわが手届かぬ高さに生りぬ  
長身の友が採りたる夏みかん中のひとつは両手に重し  
剪定を済ませたる柿の枝先の新たに増えたる四五本の枝  
新しく増えたる柿の枝の色その葉と花芽と同じさみどり  
友呉れし白花シランの殖えてをり三年前に植ゑける株よ  
殖えきたる白花シランの写真をばその株呉れし友に送りぬ  
黄の帽子黄のランドセルカバーつけ男の子三人走りてゆけり

江 藤 ひさ子 大分

その花形すず蘭の花に良く似たるどうだんつつじが白く盛りつ  
微動なく停止せるがに旅客機は雲の上行くそのひたすら  
たちまちに景色が消えつ厚き厚き濃霧の中を進む搭乗機  
快晴を独り占めして飛行する見渡す眼下は一面の雲  
早朝の庭に暫くピーピーと声高に鳴く鳥は何鳥  
「鈴蘭が咲いてゐるよ」と夫が呼ぶ庭に急ぎて屈むしばらく

歩数計すぐに外して記録せりたまたま見たる二千二百二十二歩

西 村 邦 子 兵庫

そびえ立つ姫路城の佇まひ白鷺空に舞ひ立つやうに  
天を突くやうにそびえる大天守白く輝く白鷺城  
和舟から見上げる城の彩りは堀の石垣枝垂れる桜

浮世絵が海を渡りて逆輸入北斎のベロ藍いまだ色あせず  
ユーモラスで躍動感が溢れゐる風神雷神雲にせまりくる  
凍てつきて春に芽が出ぬ球根を年どし送りくれたる友は  
土つきでダリアの球根届きたり「一年草と思へばいいのよ」  
届きたる「作品一欄」昇格の葉書を手にして繰り返し読む

石 渡 静 夫 茨城

膝ほどの高さの牡丹大輪の花を咲かせる淡い紫  
産土の八坂神社の境内に鯉幟待つ十四匹は  
鯉幟間隔狭く吊るされて息苦しさう風も入らず  
起床前に妻と娘は出発し一人の時間を自分と対話  
一年に一度の登山は息あがる一分登つて四秒休む（奥久慈男体山）  
頂上に茨城百景の碑の立てり書はどつしりと友末知事が  
西金のつつじ祭へ向かふ道カーブと坂のパノラマライン  
案内は入場料金徴取せずパンフレットと飴玉呉れる（つつじ祭）

吉 田 佐好子☆ 茨城

スーツ着た普段は都会の会社員田植えのために連休帰省す  
飛び石の休みは家で大掃除一年袖を通さぬ服たち  
念入りに風呂釜掃除をやってみるお掃除動画を参考にして  
連休もスポーツジムは休みなく普段通りに運動させる  
大阪の万博の様子映し出すみやくみやく様の異様な姿

関西のゆるキャラたちは不思議系笑いのツボがすこし異なる  
太陽の塔も今では芸術品当時は賛否両論あったと  
大阪の万博に行った前回の写真に残る記憶のピース

中 島 千加子 東京

鉢植のカーネーション並ぶ店の奥まるき蒼の芍薬の揺る  
陽を避けて蒼ゆるまる芍薬はアフロディーテのローズクォーツいろ  
水仙にスノーフレイク花萼と毒のある花ばかり咲く場所  
毒のある花たちの季節終るとき川面を緑が覆ひて隠す  
山好きのあなたがくれた花の画像なに色でもなきわれらだけの花  
吾が声は一体どんな声だった？カナリヤのうた聴き胸に手を当つ  
有限で唯一だから取り戻さう私の声と私の歌を

鈴 木 やよい 東京

折り重なり散りある椿に歩み寄り傷み少なき一つを拾ふ  
引き取りたる紫陽花に声を掛けたのち朝のパン食むマーマレードのせて  
夏のごとき日差しを進むベビーカー幌よりはみ出る足はむつちり  
引つけてドミノ倒しの自転車を呆然と見る何もできぬまま  
心地よく電車の揺れてとろけさう次の駅にて降りるといふのに  
着実に進む季節を実感す今年初めて蚊に刺されたれば  
義姉乗せて動き出したる救急車あたりの新緑強く震はす  
電灯の傘に分厚く積もりたるほこりに長き一人暮し見ゆ

## 七月集

梶 尾 栄 子 兵庫

参道のさくらはわれの標本木高らかに今日開花宣言す  
加古川の中州を覆ふ菜の花のひかりあふれて浮島のごとし  
トランプ氏をオオカミ少年のごと思ふその発言を翻意するたび  
これからの覚悟もなきまま七十年代最後となる日の平平凡凡  
互ひの身体寄せ合ふハグをして傘寿の婆が同窓会に

「優しくて可愛い婆ちゃん」にならずとも言ふべきは言ふの説に諾ふ  
ジャムの瓶ラベルの文字の小さくてルーペ探しぬ食パン待たせて  
参道の桜並木の下にひとり仰け反りつつ見る満開の花  
朝掘りし筍木の芽和へにせむ挿り鉢にたつ山椒の香の

本 間 志津子 山形

中天に雲間を透かす太陽の急に現れかつと日の差す  
曾野綾子氏訃報の記事に生前の数多介護をなしたるを知る  
職を辞し母を看取りし妹の決断重き十有余年  
万博の賑々しさはテレビにも溢れてゐたり初日の今日は  
体ごと飛ばされさうな春疾風足を踏みしめ風に逆らふ  
温暖化偏西風を蛇行させ帯広に雪の連休初日

皐月晴れ木下を行くに木洩れ日のちらちら踊る風に応へて  
雨上り仄か明るむ窓の外木木のさみどり溢れてゐたり

小林 貞子 山形

春一日花に焦がれて花を訪ふ「置賜さくら回廊」巡り

真盛りの花の道来て面差しの華やぎ匂ふ一本に会ふ

譬ふれば異国の園の桜姫淡紅透きて一重の清し

「釜ノ越サクラ」は命継ぎくれし亡き守り人に応へて溢る

攫はれて花片風に迷ひをり桜吹雪は春を連れ去る

この春も親しき人の訃を聞きぬ形見となりたる花甕の艶

花甕へ垣の桜の枝を挿す薄紅の花密やかに散れ

八重桜咲きて三度目の春巡り主役は三歳義兄の法会

藤田 夏 見☆ 広島

うで力に従兄を支え歩みたり情けなきかな膝は腫れたり

酒好きは遺伝子なるか父一升母の父親一升飲みき

孫も子も集えば飲む下戸の家系わが嫁ぎ来て塗り変わりおり

筍をなだりに掘ればゆらゆらと笹舟のごと竹の葉の散る

孫どもと袋かけいる枇杷の実に寄りきて憩うかスズメバチ一匹

四十個の花柄摘みてコンポストに踏みしめている緋色の牡丹

勝ち負けを思うにあらずナンプレとスリータイルに遊びておりぬ

東 ミチ 青森

冬雷に入会せしは二〇〇一年四階のビルと夜空の表紙

指先きに呪文かけるがに着物裁ち夏に着る上下のリフォームに挑む

池の面に散る花びらに花筏といふ名をつけて桜を惜しむなり

久々に家を幾日も空ける朝何事も無きことを神に仏に願ひたり

新幹線を仙台駅で乗り換へて八十八歳の我が一人旅

子の庭よりはるか彼方の二つ峰を筑波山と言ふ寄り添ふ嫁が

足利フラワーパークの花々に見惚れ酔ふわれに幾度も嫁が大丈夫と聞く

そろそろに我が住む家に帰らむや宇都宮も青森も空の色うつくし

松居 光子 三重

アナウンスに従ひプッシュボタン押すも「電話が大変混み合つてをります」と

オペレーターに繋がるまでをベートーヴェンのスプリングソナタのメロディー流る

ヴァイオリンとピアノの音色明るくて待機時間の快く過ぐ

上品な淡きピンクのササユリの絵の描かれたる葉書賜ひぬ

アレルギーのある孫に送る菓子えらぶ原材料をしつかりと見て

やうやくに花粉の飛散をさまりてマスクをはづし五月風吸ふ

加藤 富子☆ 栃木

「階段は薬と思え」先輩の言葉を胸に上り下りする

エレベーター・エスカレーターを横に見て一段一段貯筋に励む

筍が箱に一杯送られて頭が下がる嬉しい四月

ありがたし自然に生えたる山椒はコンクリートの隙間に伸びる

誘引の途中で折れたるクレマチス蕾付きおりコップに活ける  
奥佐野の山間の里にオカリナの音色流れるさみじりの中

オカリナの音色を拡げし谷さんを偲んで聞く二十回目のコンサート  
奥佐野の道路沿いにはおばあさんの作る朝採りの野菜が並ぶ

児 玉 孝 子 ☆ 愛知

思い居し仕事を終えて鍬洗い真向う先に春の月出づ

スーパ一の米価のあがりに驚くも買わねばならず三キロ重し

畑仕事は出来ぬと冬に思いしに木木の芽吹きて遣る気出できぬ

南から吹く風強く木木ゆらし地面を叩く四月十三日

爽やかな風に艶めく柿若葉草取る吾に休めと誘う

「ばあちゃん」と元気な声で曾孫くる紙風船を飛ばしながらに

水 澤 タカ子 山形

高瀬川の上空に泳ぐ鯉幟体ふくらむ東風を吸ひては

作りおきし紅餅もちひ白絹をしぼり染めたり友と寄り合ひ

今年また友と蒔きたる紅花の芽の出で来たり花時を想ふ

われのみの自由に使へる畠にて多種少量の作物を楽しむ

じゃが芋の種ひと袋残りあり求め来たりぬ肩に背負ひて

畝を立てじゃが芋ニキロを植ゑつける今年も出来たとわれを褒めつつ

取り置きたる朝顔の種蒔いてみる居間の日よけのカーテンにせん

藤 田 英 輔 ☆ 高知

草刈りを終えた日向で飲む水は仕上りなどはどうでも良くて

学名を「ベロニカ」という「いぬふぐり」キリストを思わせる花を持つ

信管の仕組まれているとき玉ねぎがふた玉残るコンテナの隅に

「じいちゃんのビール」と言いて抱え来る君のミルクと乾杯をする

手にのせたドライ杏のスライスはオレンジ色で今日の落陽

松 崎 みき子 岩手

花冷えの花壇に散りたるチューリップひとひら拾ひ手のひらに乗す

畑土に本気になりて鍬入れる土起こしすれば汗の噴き出る

育てたるレタスの苗を友に渡す広い畑で大きなあれ

育てたる野菜を子等に届けたしこれもあれもと箱に詰めつつ

朝なれば発声練習するらしく張り切る声は爺のカラスか

漁をする叔父の網に鱈入らず岬の春は何処ぞと過ぎる

佐 藤 幸 子 山形

五日続きの雨に桜は咲き遅れ三日ほど盛りてはや花吹雪

頬撫でる風に桜の花びらの舞ひ散る様をただ眺めをり

山の中にふる桜もそれぞれの花の季節を過ぎて移ろふ

杖つきて歩める妻の手を取りて歩幅合はせて歩む老いあり

MRIのコングトンの機械音頭痛気になるコロナ後の検査

咲き誇る真紅の椿の鮮やかさが今朝の脳内の濁りを洗ふ

放屁せねば敢へて探さぬ亀虫よわれに囚はれ命終はりぬ

# 残響集

岩村 知康 長崎

所有する農地の処分を思ひつつ何もなさずに年月が過ぐ  
年一度の田畑の納税通知書にわれは地主と再認識す  
兄二人は県外遠く住むゆゑにわが相続は必然なりき  
生前の父に意向聞かざりし「田畑の処分」兄妹で決む  
離農して田畑の処分出来ざりし父の氣持を推し量りある  
農地法第三条などひととき田畑処分の手立てを構ず  
農地法さらに農業委員会知りて初動の一步踏み出す  
処分する田畑を引き継ぐ人あるや過疎すすむとふわが古里に  
越澤 太朗 ☆ 茨城  
年越したるグリーンピースは風に揺れ蔓はクルクル支柱捉える  
育苗の芽出しの時期はそれぞれに双葉の形日々に整う  
苗植えし畑に五月雨降り注ぎ土の匂いの一面に満つ  
大小の二股異形大根はもったいなくて切り干しにする  
ピーラーでシュルシュル削る大根に香り漂う切り干し作り  
のらぼう菜春菊の花満開にパーティーの客出迎えており  
パーティーの食材はタケノコよもぎタラの芽に見つけた山うど一品添える

メインディッシュはタケノコおこわノンアルコールの泡こぼれたり  
来る秋も収穫パーティー楽しみに別れる友等に鶯の声

金子 八重子 ☆ 千葉

連休は収集なしの貼り紙を読みつつゴミを置いて行く人  
ドイリーやテーブルセンター断捨離す編み目に込めた幸も時間も  
孫程の若い上司に氣を使い小言は飲み込み波風立てず  
口元にシワを作るなポッキーをおちよぼ口でなく「イ」の口で食ぶ  
給料日で飲み過ぎましたと佐藤さん遅刻の上に鼻歌までも  
十時間も眠る能力有ったかと信じられずに笑みのこぼれる  
山芋のころろご飯に刻み葱おかわり進みとろろろろ

片桐 美穂子 ☆ 神奈川

朝ラジオ英語を発声リピートし日本語にはない音を楽しむ  
新しき「婦人之友」が届く日はゆるんだ暮らしを見直す機会  
異動後にスポーツクラブを退会す肉体労働時間が増えて  
安眠のヨガをせずとも眠れるは園児に振り回されるおかげか  
お台場は埋め立て地ゆえ不便なり日本科学未来館の遠さよ  
入り口は吹き抜け頭上には地球五大大陸の上雲が流れる  
中世の天体観測用器具は「アストロラーベ」とレプリカで知る  
天動説から地動説への移行期は科学と宗教共存できず  
新しきローマ教皇誕生し平和希求の祈りささげる

## 五月号作品一評

小林 芳枝

延焼の恐れ高いと寝入りばな孫出勤す  
停電の町へ

田端五百子  
稜線を焔はくねり走り飛ぶ類焼許すな  
と消防士らは

力を尽くしても鎮めることのできない  
山林火災の怖さを間近に体験した連作に  
は現場の緊張感と恐怖と不安が詰まっ  
ている。眠ろうとしても眠れずに消火に  
行くお孫さん達の熱意は有難く尊い。

嬉しいこと続けてありし一週間冬の青  
空高く澄み渡る

野崎礼子☆  
春の嬉しい事って何だろう。続けてあ  
るという中にはお孫さん達の進路に関わ  
ることなども含まれているのだろう。下  
句にその喜びが表現されている。

抗がん剤治療今日にて終了す戻り来る  
娘に赤飯を炊く

飯嶋久子☆  
自分の事より子の病は辛いもの。娘さ  
んの最後の治療が終り完治して帰るとい  
う嬉しさは如何ほどであろうか。祝いの

赤飯を家族で食べる笑顔を思い浮かべて  
私まで胸がいつぱいになる。元気になっ  
た娘さんの弁当を作る日も近いだろう。

雨音が徐々に静かになるときは空から  
降る雪地につもるとき 吉田佐好子☆  
家の中から外の音を聞いているのだろ  
う。そういえば降り始めは雨で次第に雪

に変わることが多く、辺りがしーんとし  
てくるような感じがする。静かな冬の夜  
の雰囲気丁寧に詠まれている。

「自衛隊消防隊らが呼んだ雨」活動讃  
へた大見出しあり 村上美江

やつと山火事が鎮まった朝の新聞記事  
の見出し、火災から町を全力で守って  
くれた消防隊と住人の願いが一つになっ  
た証のようなフレーズが印象的。

ポストには老人ホーム墓地案内塗装に  
買い取り喧しきかな 永光徳子☆

ポストには様々なチラシが自由に入れ  
られるのでちょっと迷惑でもある。その  
中から不愉快に感じるチラシを上げて  
がっかりしている様子がみえる。期待し  
ている便りが入っていると嬉しいのだが。

友達と桜並木の中を行く空の明るさ花  
のあかるさ 吉村昌子

桜の花に包まれた心地好きがゆつたり  
と伝わってくる。下句のリフレインが全  
てを伝えてくれているようだ。

まへを行く人に挨拶せる人の笑み消え  
ぬままわれに向ける 佐藤靖子

自分の前を歩いている人と前から来る  
人が挨拶をして、その笑顔のまま前から  
歩いて来る人が自分とすれ違う。よくあ  
りそうな風景だが瞬間的な事柄がしっか  
りと捉えられていて微笑ましい。

裸木を過ぎゆく風が前に立つ豫報士の  
マフラー揺らしてやまず 鈴木計子  
天気予報をアナウンサーが外で伝えて  
いるところ。画面に風の動きが見えて実  
感が伝わってくる。

夏越しのわがシクラメン三月になりて  
ようやく花茎の伸びる 山本三男☆

シクラメンは花が終ったら風通しの良  
い所で夏越しをさせるのだが雨に濡れる  
と球根が弱る。少し遅れて花茎を伸ばし始  
めた時の作者のほっとする様子がみえる。

## 五月号作品一評

藤田 夏見

船上に炊事する主婦の写真あり子を負  
ぶひ少し休かがめて

桜井美保子  
船上で生活するという生業の中で懸命  
に生きる素朴な親子「子を負ぶひ少し休  
かがめて」この表現にモノクロの写真が  
浮かびます。時代を支えた尊い姿です。

五日経て今夜も炎ちろちろと山肌を這  
ふと消防士嘆く

田端五百子  
なかなか鎮火しないニュースに国中が  
気を揉んだ岩手県の大震災。太い木が燃え  
盛ると少しばかりの水をかけたくらいで  
は外は消えたに見えるが、中心部に火種  
が残りと又燃え始める。そこいら中に  
あるひとつ一つの煙りも丁寧に着かめて  
消して行く。消防士の繊細な注意と体力  
には頭が下がります。

友が驚くナウイ師と歌会の骨組決まり  
待たれる四月

高橋燿子☆  
冬雷の川越の会員が新しい歌会を始動、  
準備の集まりには師もお越しだ。その姿

の今どきらしさに少しばかりのざわめき  
があった。待たれる四月です。

幼馴染いるのはいいね息子言い転勤族  
の憂い今更 浜田はるみ☆

家族揃って暮らす為に父親の勤務地に  
ついて行かれたのだろう。私の甥達も幼  
馴染はいないと嘆いています。「転勤族の  
憂い今更」が沁みる歌です。

転た寝のほんの僅かに夢を見て家族総  
出の何故か餅搗き 田中祐子☆

賑やかな餅搗きは家族総出なのだ。ほ  
んの少しのうたた寝に現れたのは、現在  
なのか、作者の子供時代だったのか。

乾き切った木にも草にも雨降りてあた  
り静かに沁み込みてゆく 林美智子☆  
待ち望んだ雨に静かな作者の喜びが溢  
れる歌です。この頃に日本のあちこちで  
続いた山林火災への思いもうつし出され  
ている。読者は連想します。

吾が歳を言えば店主も勧めまい植える  
手順をうれしく習う 松中賀代☆

三年後に稔る葡萄の苗を買う作者。そ  
んな先のことはちよとね、と思ひながら

実のなる木には大きな希望があります。  
植えて育てる手順もしっかりと学習。

わが生まれしこの家屋敷さら地にとす  
るを思いて写真とりたり 吉村昌子

生家は嬉しいものだ。家のめぐりは幼  
い作者を育んだ思い出の尽きないゆりか  
ごのような温かさに満ちているのだ。時  
は移り変わり全てが更地になる知らせに  
最後の訪問。写真に撮っている。

カーテンを開ければ雀並びをり吾が撒  
く米を今かと待ちて 須藤紀子

嬉々とした雀。作者の心躍る朝の習慣。  
まへを行く人に挨拶せる人の笑み消え  
ぬままわれに向ける 佐藤靖子  
自分に向けられた笑顔ではなく、前を  
行く人への笑顔なのだ。その和顔に対し  
て作者もにっこりと返されたのだろう。  
良い一日となられたと思う

内向きと下向きの枝を剪定す剪定のポ  
イントを検索しつつ 齋鹿ミヤコ  
スマホを片手に庭木の入手、剪定のポ  
イントを繰り返し見ているのだろう。素  
敵な仕上りとなつたのは何の木かな。

山小屋の予約取れたる報告をラインに受くる小雪舞ふ朝 益坂順子

山小屋の予約が取れたと連絡を受けた作者。まだ小雪が舞う頃ではあるが、山を思い心が弾んでいることだろう。山登りに対する熱い気持ちを感じる。

野蒜摘み浅蜷と合せぬた仕立て春の味はひ懐かしみをり 山本述子

野蒜を採り、浅蜷と合わせてぬた仕立てにする。おいしそうだ。自然の恵みを楽しみ、季節を味わう小さな幸せ。豊かな日々の暮しがみえる。

冬枯れて寂しき段畑彩りてホトケノザ咲くところどころに 川上美智子☆

冬枯れの段畑にホトケノザが咲いている。何でもない花ではあるが、その小さな紫の花に春を感じ取っているのであらう。調べたところ、春の七草というホトケノザは別物のようだ。七草の方はキク科の「コオニタビラコ」で、黄色の花が

咲くそうだ。

骨折りて本人認証済ませるもまた蹟きぬワнтаイムバスワード 松居光子☆

ネットショッピングに悪戦苦闘しているようだ。最近ではセキュリティの強化もあって、なかなか大変だ。それでも、一連の歌を読むと、カード会社に直接電話で問い合わせるなど積極的に対処している。なんとか終えた時はほっとしたことだろう。お疲れ様でした。

山火事の上空をヘリコプター数機飛ぶ徹夜の消防士寒波のなかで

ニュースを聞いた時、東日本大震災で被害を受けた地にまた山火事かと耳を疑った。上空を飛ぶヘリコプター、寒波のなか徹夜で作業する消防士たち。現場での緊張感が迫ってくる。

赤黒く炎の伸びる山の火事夜空に向かう鎮まれと祈る 同

目の前で赤黒い炎を見る強い衝撃。自然の猛威の前に人間の力は小さい。夜空に向かい山火事が鎮まることを祈る作者

の姿が切ない。

避難先の老々介護の叔父夫婦肩寄せ合ひてパンを食べをり 松崎みき子

迫りくる炎を逃れ避難してきた叔父さん夫婦。日常が崩れ、大きな不安と心細さにさいなまれているに違いない。それでも、互いを気遣いながら肩を寄せ合っている。この様子を見た作者も安堵したことだろう。

頑張りが報はれぬことまた一つ夫の病のGFR値 井上鈴子

GFR値を改善しようと努力されたのだろう。でも結果は思わしくなかったようだ。頑張っても報われない事は多い。それを「また一つ」と言って受け止め、くじけていない。

休日は体操などを少しやり後は六腑に酒しみ込ます 平りょう

休日の楽しみはもっぱら六腑にお酒をしみ込ますことらしい。申し訳程度に「体操などを少しやり」と言っているところにおかしみを感じる。

## 久保田登歌集

### 『百花蜜』を読む

桜井美保子

著者の第六歌集で令和二年半ばから六年半ばにかけての作品四百四十一首を収めている。久保田登氏は昭和十八年群馬県桐生市の生まれで昭和三十七年「形成」に入社して木俣修に師事。平成五年「形成」解散後は不定期で個人誌を発行しておられる。本歌集の帯文に「著者八十歳前後の歌」とあるのにまず惹かれた。私も昭和二十二年生まれで著者と年代も近いので、この歌集に親しみを感じた。立ち止まっては読み、又立ち止まってゆっくり読むということを中心にした。

郷愁をいつか基準にボタン押す自販機

のボトル「谷川連峰の水」

自販機で飲みたいものを選ぶ場合、「郷愁」がその基準になるという。心の底にあるようなものを明確に掬い取っているところがユニークで面白い。

文庫本に髪近づけて読む少女スマホ

氾濫の車内の席に

サングラスをかけて得体の知れぬ男

外せば柔らかな顔に笑ひぬ

みんなスマホばかり見ているのにこの少女には驚く。こういう子もいるのだと思うと何か頼もしい。濃いサングラスをかけた男というと何やら怖い感じだが実際はこういうこと。ほっとするやらおかしいやら。この一冊には捉えどころが面白くて頷いてしまうものや思わず微笑んでしまう作品が多い。作者のもの見方や生き方が感じられ、私などは年を取るのが怖くなくなってきた。まさに年齢を重ねて見えてくる世界があるのだ。作者の円熟の世界。そして読者にはそれらの作品をじっくり味わう楽しみがある。

妻の好む「草花コロツケ」買ひ足して

て帰らばしばしば波たざらむ

明日を信じてゐしに違ひなき女子学生

わが妻となり幸ひなりや

独り言いふのも対話に他ならず亡き

母などをよみがへらせて

パソコンの故障も時には苦にならず

鉛筆3B息吹き返す

大谷に関心持ため少年が苛めぬかれ

てゐなけりやいいが

心に留まる歌はいろいろあつて読むほどに作者の歌の世界に包まれてゆく感じである。

抑留されし亡父を呼ぶゆる買ひて来

し山崎製パン「三角シベリア」

不器用であつたに違ひなき父の凌ぎ

しラーゲリの三年余り

シベリアの捕虜収容所の過酷な環境で過ごして帰還した父を思う。そして今、世界で起こっている戦争に目を向けている。

ウクライナ産百花の蜜を朝食のパン

に塗りつつ騒立ち易し

停戦の兆し日に日に遠くなり百花の

蜜の行くへおもふも

あとがきで歌集名とした「百花蜜」に触れ「数多の災厄に曝されながら、それでも辛抱強く咲き続ける花々を意識しながら付けた」と記す。

気力まだあるうちにやりたきことありとそろう踏み込むアクセルペダル新たな一步を踏み出す気力と意欲。この一冊に私も大いに励まされた。

## 五月号作品二評

井上 萱子

犬猫を飼はぬ我家の庭先を大きな猫は  
ゆつくり歩く 石渡静夫

「誰の縄張りでもないところは、ゆつくり歩かせてもらいます」。猫の眩しが聞こえてきそうな歌。「大きな猫」と特定して存在感が大きく印象的。

会話の後に必ず「がんばらうね」と言ひ合ふ超高齢者同士のわれら 東 ミチ

初句第二句は大幅な字余りだが、これを言わないと成り立たない歌。高齢者同士の「がんばらうね」は、相手も自分も励ます温みのある言葉で生きている。

門構へ古き海辺の宿の席さやかながら身内の宴 小林貞子

前二首孫夫婦の歌があったので、これも孫夫婦の祝いの席かもしれない。門構えの古きは老舗の宿だろう。晴れがましい祝いの席も控え目に詠み人柄がにじむ。百歳の人に聞いてみたし人生で一番良

かったことは何かと 植松千恵子

百年も生きれば、良いことも悪いことも数えきれないほどあつての人生。人生で一番良かったことは何だろう。含蓄のある問いかけで深い歌になった。

煮込みたるおでん鍋卓に皆揃ういたたく今宵心温もる 児玉孝子☆

寒い日のおでん鍋は本当にごちそう。熱い具材に体は温まり、「卓に皆揃う」で、心まで温まる様子が詠まれた。

馬鈴薯を切り分け灰を被せおり白梅ひとつ綻ぶ庭に 藤田夏見☆

種芋は四十グラムを目安とす芽を確かめて父と切りし日 同

馬鈴薯の植え付け前の種芋の準備。種芋に灰を付けることや、芽を確かめるなど、作業の手順が見えるようだ。

年末に叔母の電話が無い事を心配しつつ賀状送りき 永野雅子☆

来るはずの電話が来なければ心配になる。そんな気持ちで賀状を書いた。叔母骨折の連作冒頭の一首。次の歌を示唆する。すつぽりと帽子にマスク襟も立て用意

周到歩きなむいざ 梶尾栄子

健康維持に毎日歩いているのだろう。寒い日の完全装備。「歩きなむいざ」は、意気込みそして自らの背中を押すことば。

金色の固まりとなりの背中を押すことば。金色の固まりとなりの背中を押すことば。く三月の道 藤田英輔☆

葉の出る前に黄色に透き通る美しい花。固まって咲いているところは、金色に見えるかもしれない。下の句が美しい。次々に開花してゆく椿ありピンクに白にしんがりは赤 小嶋知葉☆

品種によって椿の開花にも早い遅いがある。ピンクに白にと色の具体で春の実感が濃い。「しんがり」の言葉をうまく使い、赤で締めたところに重みが出た。

和やかな家庭を築き上げたらう会ひたいなこの年なれば 野口秀子

相手は男性だろうが、謎めいたところが魅力。ドラマ性が潜んでいる。

歓声に包まれ子犬は尻尾ふる「初めまして」と小箱の中で 西村邦子  
歓声に応えるように尻尾を振る子犬。かわいさに溢れ読者も頬がゆるむ。

## 五月号作品二評

江波戸愛子

三百年先人の遺志を引継ぎて干拓成りき戦後の昭和 石渡静夫

干拓地を見下ろすやうに高層のマンション建てり春の日浴びて 同

布佐を歩く会に参加をされて詠まれた一連の歌に学ばせていただいた。

会話の後に必ず頑張らうねと言ひ合ふ超高齢者同士のわれら 東 ミチ

頑張らうね、は魔法の言葉のような気がするの筆者だけではないようだ、超は付かなくても高齢者同士の友と別れるときに自然に口に行っていることがあるのでこの歌に親しみを感じる。

下は車庫上は住居のベランダの手摺を越えて屋根雪崩積む 小林貞子

十三馬力が高きアーチに飛ばす雪背丈に開く切通しの道 同

今年は雪の量が多いのだろうか。屋根から落ちた雪を詠み、背丈ほどの雪の間を通る冬の暮らしの大変さを詠む。

コストコの中は広くてゆつくりと見ながらまわる何買おうかな 早乙女イチ☆

コストコは会員制の倉庫型の店でとても広く品物の量は多いような気がする種類は多い。店の中を楽しみながら歩く作者の姿がうかぶ。

煮込みたるおでん鍋卓に皆揃ういたたく今宵心温もる 児玉孝子☆

家族がそろって食べる熱々のおでんの美味しさを詠み、家族の優しさ思いやりに感謝の気持ちが結句によく判る。

薪を割る音聞きおれば弟の姉に勝りぬ力の強さ 藤田夏見☆

お孫さんだろうか、いつも姉に負けていた弟さんの成長を薪を割る音で気付いた作者の驚きと喜びが伝わる。

寄りかかる孫の重さで実感す確かな成長十二歳の春 川俣美治子☆

お孫さんの成長を体の重さで感じたこと詠んで、作者とお孫さんの仲の良さが伝わるがこの歌に甘さは感じない。お孫さんの成長を喜んでる作者がうかぶ。高齢のわれ等なれども女子は女子女子

会しましよ弾けてランチ 梶尾栄子

リズムの良い楽しい一首、結句に高齢女子だけの集まりの場がみえるようだ。

食事とおしゃべりは齢に関係なく楽しい。雪吊りの満天星に積もる雪景色のどかに眺む平和なわが庭 水澤タカ子

他に核・原爆を詠んだ歌があり、若い時には肩をくんで原爆の歌をうたつていたという。下の句の「平和なわが庭」に穏やかに暮らせる喜びを詠む。

友を見舞ひに来たる北海道久びさにあひたる顔を見詰めて安堵す 大野 茜

とてもだいたい友なのだろう。見舞いに来て会った友の顔を見つめて安堵したという、離れた所に住む友ならば会いたいと思う気持ちがよく判る。

体操を教えてくれる友ありてわが腰痛のうすらいでくる 小嶋知葉☆

日々の生活の中で痛みを感じるのほとても辛いことと思う、特に腰の痛みは辛い、その腰痛の体操を教えてくれたおかげでと友への感謝の気持ちがたつた。

## 五月号作品三評

桜井美保子

嫁ぎ先の家の廊下は檜にて姑が光らせ  
われた磨きき 佐々木政子

檜の廊下を磨くことを姑から引き継ぎ  
作者も丹念に磨いてきた。それも今はも  
う過去のこと。懸命に生きてきた日々を  
振り返っている。懐かしさと自負の心。

ソプラノリサイタル聴きて出づれば北  
東に白く冴えたる寒の満月 奥山清子

美しいソプラノを楽しんで会場を出れ  
ば冴えざえとした満月が凍るような光を  
放っていた。このような季節ではあるが、  
作者の心は充実感に満ちている。

幸せが飛んで来る意のコチヨウラン友  
から届きぬ夫の命日 高藤朱美☆

夫の命日に友から届いたコチヨウラン  
の花。作者はその花に元気づけられたこ  
とだろう。友の温かい心と作者の前向き  
な生き方が感じられる。

大豆炒りやかんにしゅわしゅわ沸騰す  
母を偲びて福茶飲みたり 塚本節子☆

母が作ってくれた福茶を今は自分で準  
備している。大豆を炒ってやかんの湯に  
入れ沸騰させる。母のことを思い出しな  
がら。「しゅわしゅわ」という音が幸せ  
な気分にくれる。

三泊の仕事無事終え帰路につく車窓の  
夕日まばゆく目にしむ 山崎 猛☆

仕事先の地域に宿泊しての仕事は、何  
かと大変なことも多いのではないかと思  
う。下句にはそれを無事に終えた安堵感  
がある。「まばゆく目にしむ」がしみじ  
みと読者の心にも響く。

「風の無いドライヤー」なるタオル買  
う「吸水速乾スポンジ」もある 金子八重子☆

洗った髪を乾かすのにドライヤーは必  
需品だが、それを使わずとも髪が乾いた  
状態になるような便利なものがある。そ  
の商品名が消費者の心を動かす。女性ら  
しい視点で捉えていて楽しい歌。

常連の客は注文のほうれん草「無農薬  
よね」と笑顔で受けとる 越澤太朗☆  
いつも注文してくれる客とのやりとり

が温かく詠まれている。農業に力を注ぐ  
作者の作ったほうれん草は無農薬。その  
美味しさや安全性が信頼されている。買  
う人、売る人ともに笑顔になる場面がク  
ロースアップされた。

豪雪に枝の裂けたる林檎の木剪定すれ  
ば鈍き音する 長谷川 剛

豪雪地帯の冬。雪の重みで枝が裂ける  
のは日常よくあるのだろう。その林檎の  
木を労わるように剪定する。「鈍き音」  
は枝の裂けた木の声のようにも思う。

やがて春外は白梅紅梅も今盛りなり元  
気を出そう 今福崎子☆

ホームに入居され新しい生活が始まっ  
たようだ。屋外の梅の花に力を得て一歩  
一歩進む作者。「元気を出そう」という  
言葉には読者も励まされる。

ボランティアで小学校の掃除する九十  
二名の児らを思いて 長澤千恵子☆

子供達が落ち着いて勉強できる環境を  
整えるために小学校の掃除をしておられ  
る。手際良く動く様子。九十二名の児童  
を思う気持が籠っている。

## 五月号作品三評

橘 美千代

五十年前の黒きベールを着けてゆく告  
別式の朝は温もる 高藤朱美☆

後の歌に入院中のローマ教皇に祈りを  
捧げるとあり、作者はカトリック派のキ  
リスト教徒なのだろう。身を飾るのでは  
なく信仰ゆえに礼拝や葬式にベールを纏  
う。慎ましい貴婦人のような姿が浮かん  
でくる。五十年前の出来事は不明だが、  
思い出の籠もる黒いベールに包まれて作  
者は悲しみの朝も温もりを覚えて。

春一番風の如く吹きぬけてビル街の空  
黄に濁りおり 塚本節子☆

春の訪れを告げる最初の南の風とい  
う。筆者の住む新潟県には無いらしいが  
今日も春先の強風が吹いている。大きな  
鉢植えが倒された。空が黄色に濁るとい  
うのは黄砂であろうか。ビル街が特異。

珈琲好む兄に砥部焼き藍色のカップを  
ひとつ選びて届けむ 井出裕子  
筆者も器が好きなのでとても羨ましく

思えた。砥部焼きの蕎麦猪口とつゆ入れ  
を持つている。厚手で素朴な感じが氣に  
入っている。次の歌も喉から手が出そう  
な気持ちに読んだ。筆者と違いきちんと  
大切に棚に保管しておられるのだろう。

三泊の仕事無事終え帰路につく車窓の  
夕日まばゆく目にしむ 山崎 猛☆  
泊まりがけの大きな仕事を終えて帰路  
につく作者のほっとした気持ちと達成感  
が無理なく自然に表現されている。仕事  
で緊張している間は目に入らなかつた夕  
日を今しみじみと眺めているのだろう。

夕方の街に流れる「春の小川」雪がち  
らつく鉛色の空に 首藤文江☆  
冬の暮れゆく街角に流れる楽は「春の  
小川」。鉛色の空に雪のちらつく風景に  
ミスマッチなのかなメロディだ。春が  
待ち遠しくなる。以前よく盲人用信号に  
「とおりゃんせ」が流れていた。どこか  
物悲しく胸に沁みる音色だった。

「無理するな」人は言ふけど目の前に積  
もるどか雪誰が処理する 長谷川 剛  
同じく雪の多い地に住むものとしてよ

くわかる。除けても除けてもまたすぐ雪  
が降り積もり際限がない。しかし除けな  
ければ家からの出入りも道の通行もでき  
なくなる。作者の体を心配して言ってく  
れているのだろうが現実はそのような  
いのだ。高齢の母に筆者も同じことを  
言っているとはたと気づいた。

真夜中の静まり返るキッチンに待機ラ  
ンプの点滅賑やか 今野澄子

真夜中のキッチンに光景という特異な  
素材に目をひかれた。キッチンには炊飯  
器、電子レンジ、トースター等の調理器  
具や電気ポットやエアコン等家電製品が  
多数設置されていて夜は黒い影のよう。  
タイマー設定があるいは故障か。深夜の  
暗く静まり返るキッチンに待機ランプが  
点滅し続けていつもと違う雰囲気。

大寒に汁粉つくりぬ家の内にほんのり  
甘き香り満たして 長澤千恵子☆

一年で最も寒さが厳しい大寒に暖かく  
甘い汁粉を作ると。家の中を甘い香りが  
漂って和む。心身ともに温まり寒さを乗  
り越える活力が湧いてくるようだ。

# 作品二

白鳥四丁目公園

小林 芳枝 東京

巨大なる貯水槽ふたつ地に埋めて工事始まりき去年の今ごろ  
中央の奥に防災倉庫あり白き扉もがつしりとして  
テント張り防災バーゴラになるといふ日陰の中にベンチが二つ  
組み立てて災害トイレになるといふマンホールあり道路に近く  
災害の時は竈になるといふ収納ベンチは二人掛け  
天井付きネットの中にサッカークールボール追ひかけてゐる数人の子ら  
健康遊具ひとつ置かれてゐるところ植栽地といふ若草のなか  
中央の花壇はプランタータイプ董の花は未だ幼く  
土のなき公園の樹木低くして四階のわがドアなども見ゆ  
益坂 順子 福岡  
入籍をしたる孫の来るといふ糯米あづきの在庫確かむ  
この年も銀竜草に出会ひたり樹林の中のさはやかな白  
訓練といひて大阿蘇高岳の仙酔尾根に挑む仲間と  
少しだけ深山霧島ながめつつ緊張はしる溶岩帯に  
休憩の度に振り向く外輪山かなたに拡がる新緑の美し  
二時間の急登続くバカ尾根は通称通りやはりバカ尾根

ごろごろの溶岩帯の登山道皆よぢ登り艶増す岩の  
中岳の噴煙気にもなく若者多き平日の山  
観光のヘリコプターの音激し花の季節は多忙極まる

植松 千恵子 ☆ 静岡

国産のバナナ一本二千円作る苦労思いパクツとはいいかぬ  
桜舞うバス停の人の頭にも払う暇なく急ぎ乗り込む  
黄緑の御衣黄桜咲いている99番の幹と教えられたり  
並木道桜の管理に番号あり幹に貼られたる99を探す  
満開に花咲かせたく厳寒に耐えて育くむ桜の意気地  
出番多きハラスメントという言葉昔は誰でも嫌な目に遭ひき

早乙女 イチ ☆ 栃木

いつの間に緑の増えたミカンの木枝葉の中に白い花咲く  
キンカンの青葉が出て来て今年また生ってくれるかじつと待ってる  
高高と柚子の実生つてそよ風にゆれて爽やか取るのは大変  
長男が買物にでも行くかいと言う何を買うのかよく考えて  
夕ごはん何にしようか鮎にしようこれいいのかギョーザも買おう

川上 美智子 ☆ 高知

仁淀川の兩岸彩るさくら花鉄橋渡れば吾が住む「いの町」  
見頃なる桜の花に通り雨「散らさないでね」一人呟く  
濡れて咲く陽光桜を見上ぐれば満開の花は皆我に向く

五月号 十首選

冬雷集 益坂 順子

胸ふかく秘むる泉を乱したる小石のありて一首遣りぬ 大山敏夫  
児の丈に屈みて見上ぐる父親の姿ほのぼの温みの有りて 櫻井一江  
遠き日を現が如きもの言いの夫の介護に我もうなずく 吉田綾子 ☆  
新しき車輻は前向き坐席なりわずかな区間を旅の心地す 酒向陸江 ☆  
わが窓ゆ眺むる山の大方は見尽くしたれど飽くることなし 天野克彦  
夜明けかと寝ぼけ眼に見る窓に午前3時の強き月光 嶋田正之  
廃屋の門から玄関まで埋めて踏まれてをらぬ雪積もりたり 橘 美千代  
夜明け前祈りに応えるように降る雨を見つめる大船渡の海  
ブレイクあずき ☆  
お品書きのる陸月膳食材の高きを聞けば不足は言へず 姉川素枝子  
空中に杉の花粉を撒き散らし響く夕べの風は募りぬ 井上楨子

五月号 十首選

五月集／残響集 山口 嵩

一夜明け雪のなき道ありがたく台車にのせてゴミ出しに行く 本間志津子  
山小屋の予約取れたる報告をラインに受くる小雪舞ふ朝 益坂順子  
野蒜摘み浅蜷と合せぬた仕立て春の味はひ懐かしみをり 山本述子  
湿りたる土の匂いに立ち止まる落ち葉の下に新芽の息吹 川上美智子 ☆  
北は雪南は青天水仙は頭を下げて風の吹くまま 安川敏子 ☆  
取り残し庭に根を張る雑草の葉の枯れたるも芽吹きはじめる 津田美知子  
頑張りて報われぬことまた一つ夫の病のGFR値 井上鈴子  
手を振りて笑顔で向かふ手術室夫の背中が小さく見ゆる 佐藤幸子  
猫二匹布団の中に入り来てごろごろ鳴くを聞いて眠りぬ 羽田孝輝  
異文化の交流残す陶磁器は東と西の往来映す 後藤恭介 ☆

テーブルに散りたるローズマリーの花小さき二つを惜しみつつ拾う  
林には野鳥の呼び合う声響く遠く近くにやまびこの如  
山裾より湧き出づる水ちよろちよると細き流れの音心地良し  
湿りたる草地拡がる辺りからとぎれとぎれに牛蛙の声

卯 嶋 貴 子 ☆ 東京

桜の花散りて緑の木の芽吹き爽やかな風が窓から入る  
しとしとと芽吹き雨の降りそそぎ木々の緑がボリュウムを増す  
連休でどの道路も大渋滞青梅市から奥多摩湖を廻り五日市に出る  
キツツキの木を突く音ウグイスの鳴く声がしてヤマガラが水浴びをする

川 俣 美治子 ☆ 栃木

切る爪の薄くなったと感じつつ変わらぬ形に父を思いぬ  
軒先につばめが一羽行き来して時は確実に初夏へと進む  
ジージーと歯削る音に目を閉じて流れる歌に気持集中す  
初夏のような風に吹かれるマーガレット寄りくる蜂と一緒に揺れる  
気が晴れぬような日の空は曇りが良い澄み切った青は眩しすぎるから  
昼炊きのご飯の匂い部屋に満つ連休の日はゆっくり食事を  
バチカンで買った思い出のリング見る新教皇の決定の日に

大 野 茜 神奈川

母倒れ仕事と看病背負ふ甥昨日の電話の疲れたる声  
この店の大判焼を好みぬし兄に供へむと五つ求める

冬近く後ろの髪の毛いつもより五ミリ伸ばして寒さを避ける

千両の赤い実なべて失くなりぬ夜明けの庭に小鳥が音なく

冬枯れの庭に明るみ齎せり鉢のパンジー四色八つ

闇バイト怪しき仕事と思ひつついつしか深みに嵌まりゆくらし

祇園より八坂神社へ向かふ街外つ国の人溢れて喧し

永 野 雅 子 ☆ 東京

還暦の祝いの席を設けると娘婿から言われ感謝す

祝いの日の秋葉原駅は迷宮の如しビル群高く続きて

店に着き鍋を囲んで乾杯す美味しさに笑み溢れ嬉しき

藤まつり茶会にバスで亀戸へ駅前通りの雑踏抜けて

日に当たり汗ばむ額を拭いつつ天神様へ歩み進める

一服の茶に癒されて飾られた鉄線の花に涼しさ覚ゆ

津 田 美知子 岩手

米の値の上限見えぬ値上がりにため息つきつつ五キロ買ひたり

菓子袋それぞれ持ち来る義姉達と茶飲み話の尽きること無し

山火事の巨大さ示す山肌は赤茶色のまま芽吹かぬ木々見ゆ

九歳で逝きし娘の誕生日に供花新しく取り替へる朝

元気なれば四十五歳の亡き娘如何なる人生歩みぬたやら

下手すぎるうぐひすの声の正体はリハビリ中の夫の口笛

夫と吾ゆつたりと飲む珈琲は少しの会話と鳥の囀り

## 五月号 十首選

### 作品一 石渡 静夫

わが風邪を夫に移し快復す元氣になれ  
ば優しくできる 斉藤トミ子 ☆  
幼馴染いのはいいねと息子言い転勤  
族の憂い今更 浜田はるみ ☆  
実が生るは三年先を店主言う吾は構わ  
ず葡萄苗求む 松中賀代 ☆  
熱気球の飛び始めたる暁の空の彼方に  
筑波嶺の立つ 本郷歌子 ☆  
日本平裾野に霞たなびいて白嶺の富士  
は空に浮かびぬ 伊澤直子 ☆  
小雪舞う電線に並ぶ小鳥達互いに頭の  
雪を啄む 永光徳子 ☆  
「行蔵は我に存す毀誉は他人の主張」  
夫のシールはがれてきたる 稲津 孝子

食肉も卵も飼養の過酷さを知れば痛ま  
し日々の食卓 須藤紀子  
埼玉の女孫の結婚式に行く準備遅々と  
進まぬ九十三歳 江藤ひさ子  
収容所再現したる暗き部屋置かるる人  
に父が重なる 鈴木計子

## 五月号 十首選

### 作品二 大塚 亮子

布佐駅の北口通に人は無くシャッター  
閉まる嘗てのスーパー 石渡静夫  
会話の後に必ず「がんばらうね」と言  
ひ合ふ超高齢者同士のわれら 東 ミチ

越して来て馴染まぬ人と思いが今朝  
挨拶され明るくなりぬ 植松千恵子 ☆  
煮込みたるおでん鍋卓に皆揃ういただ  
く今宵心温もる 児玉孝子 ☆  
薪を割る音聞きおれば弟の姉に勝りぬ  
力の強さ 藤田夏見 ☆

年末に叔母の電話がないことを心配し  
つつ賀状送りき 永野雅子 ☆  
旅の本買い求め手に心躍る開く楽しみ  
めくれれば更に 川俣美治子 ☆  
落語家の話芸のうまさ小気味よく江戸  
中期へと誘われゆく 小嶋知葉 ☆  
年どしに桃の若木は育ちゆき孫は迎ふ  
る成人式を 西村邦子

カブに似たビーツの収穫おそろおそろ引き抜いてみた見事な出来ばえ  
子や孫達十三名のバーベキュー ゴールデンウィークの駐車場にて  
佐野城跡のお堀や石垣鯉の池桜は見事な花吹雪  
だんだら坂きつく感じる老の足桜散る道茶室に続く  
咲きわけの赤やピンクの八重椿余所の庭木をうらやみて見る

葉山月山の真白き眺めある夜明け二階のフロアのカーテン開けて  
兄からの緊急連絡近く住む義理の従妹の死を知らせくる  
入棺に間に合ふやうに義理の姉に迎へられゆく夕方の道  
葬式に娘と共に参列す会社関連の生花あまた  
春雨に新緑きはだち庭樹々のひかり輝くもうすぐ夏か  
乗客の僅かとなる電車に座すわれ最高齢か昼下がりに  
爽やかな白い牡丹の花の咲く匂ひなくとも引き寄せらるる

緑葉のせまりくるようなりビングでシャンソンを聴く「しますえよしお」の  
せつなさど甘さ漂う歌声の「生きる」をまた聴く「しますえよしお」の  
久久の息子の帰省に好物のたけのこ料理に腕ふるひたり  
あれこれとたずねることの多き吾れに寡黙な息子静かに笑まふ  
三時間釘づけに見る映画ありあゝ「モンタナの風に抱かれて」

母の日を目前にして宅急便同時に届く娘と息子から  
日一日緑濃くなる樹々ながめ思わず歌う「若葉」の歌を

トンネルはなまはげの口赤鬼のなかを潜りて男鹿の地に入る  
初めてのカウンターに子らはその父母に話してをりぬ「まはらない寿司」と  
一昨年の豪雨に失せてしまひしか白川沿ひの東一華は  
満開の広場の桜にひとり立つ花に囲まれ中空にゐること  
梅・桜・チューリップ・木瓜・水芭蕉一時に咲き里に春来ぬ  
山菜に牛肉添へて姉に送る兄への代はりと言はずにおこう  
畑隅の路の皮むく指先の渋色なれど板麩と煮物にす  
直江杉の隣の寺にひそと咲く薄緑色の御衣黄桜

庭の辺の路の臺五個揚げてをり香り漂ふ狭き厨に  
去年遅くばら蒔きたる茎立の若菜おろぬき今朝の味噌汁  
隣の庭に啓翁桜咲き盛る我家の薬移植し三年  
病院の送迎のバスは七人乗り次次入院し夫一人乗る  
一人でも送迎し呉るる病院の送迎バスに頭を下げる  
離れ住む孫より手作りの封書来る涙払はず繰り返し読む  
孫の便りに「在英日本国大使館日本の法律にて結婚」とあり  
イギリスの孫へのハガキに祝言を書きて送れば送料百円

## 作品三 天野 克彦

窓の明かり今日暗ければ粉雪の降りあ  
てうつすら積りそめをり 佐々木政子  
午前二時群青色の空に星一つ温き床よ  
り窓を見詰むる 奥山清子  
男物のコート羽織りて家の中だるまに  
なりて夫を想う 高藤朱美☆  
赤彦の歌と重なる信濃路の湖畔の辺り  
の白樺寒し 山崎 猛☆  
長生きは大変なものと先輩は筋トレ脳ト  
レ心トレまでも 金子八重子☆  
不織布を外し育てるほうれん草一気に  
伸びて赤根たくまし 越澤太朗☆  
やがて春外は白梅紅梅も今盛りなり元  
気を出そう（ホーム入居） 今福崎子☆  
たまさかに友と出会ひて互ひの老いた  
る姿におもはず笑ふ 長谷川 剛  
枝打ちの桜を花瓶に挿したれば芽の膨  
らみて開花の萌し 今野澄子  
急激に雪解け進み落つる雪屋根の汚れ  
も共に流して 長澤千恵子☆

## ■交流他誌紹介（ご批評御礼）

## ●新アララギ 五月号

「歌壇座標」より

百均のカレンダーにもまつさらな三  
百六十五日が有りて嬉しき

金子八重子

口癖を「どうってことない」にして  
みよう案外前向きこれでいけそう

【八木康子】「冬雷」三月号「残響集」  
より。力みのない軽やかな詠みぶりに  
惹かれた。気持ちをもつて詠んで心  
地よい。当り前を当り前と思わない  
瑞々しい感性は天性のものだろう。歌  
を詠もうとの気負いが感じられないの  
も若さゆえかと思ったが、一連の中に  
「七十年前姉のサンタは」とあって、  
年齢は関係ないのだと得心した。

二首ともに共通する姿勢、ものの考  
え方、心の軽やかさが周りを明るくし、  
それが作者にも跳ね返って、好循環に  
なっているだろうと思うと羨ましい。  
一首目の結句「嬉しき」には、短歌  
を始めた頃「形容詞は使わないで詠む

# 作品三

ワーズワース

新井 光 雄 ☆ 東京

ワーズワース読めば想いは「草原の輝き」のなかナタリー・ウッドヘ  
ナタリーが女子高生で涙しつワーズワースの詩の朗読を  
ナタリーは教室にたち心から「帰らぬ青春」「嘆くなかれ」と  
監督がエリア・カザンと教えられ映画の世界に憧れを持つ  
大学に映画講座のある時代映画監督目指せしことも

ワーズワース詩集を買ったあの夜は旅先だった金沢の街  
金沢とワーズワースの結びつき映画「地上」に縁のありしか  
テレビには金沢の街映されて棚から取り出すワーズワースを  
一度だけ高校時代に観し映画その意味深まる八十路を過ぎて

佐々木 政 子 岩手

鳥二羽飛びゆくを見つつ腰下ろす斜面によもぎ萌え出づる見ゆ  
きしむ音ひびかせ電車遠くなり人無き駅にわれは下りたり  
涅槃図の数多の動物その中に象も泣きをり慎み拝す  
片羽となりて死にたる蟬一つ玄関前に陽を浴びてをり  
蔵の中に二年を経たる梅干しの塩のかたまり赤実に光る  
本堂の太く光れる柱なづこり逝くとふ諺よみつつ  
珍しく遠雷聞こゆこの音も何年ぶりかと思ひ寝につく

山 崎

猛 ☆ 埼玉

中学の集団就職忘れない「葵丸進」の天井の味

われのまた美空ひばりや「紅孔雀」いまでもメロディくちずさむなり  
歌会の仲間と話せば楽しくて孤独とならず我が会話まで

旅先で名前呼ばれて驚きぬ団塊世代の友は微笑む

園児バス、我が家の前に停車していつもの親の会話にぎわう

帰宅してひばりの歌を聴きながら彼の人思う港町13番地

佐野よりの臨海学校嬉しくも母は夜鍋で我が服を縫う

「紅孔雀」聞く楽しみで帰宅する貧しく遠き日のなつかしく

高 藤

朱 美 ☆ 茨城

足元を雀と鳩が横切りぬ驚く我に飛び立ちもせず

満開の桜ふぶきの舞う中を友とドライブ優しい時間

教会の玄関横のマリア像待望なりてお顔を仰ぐ

持ち寄りのパーティー開くは七年振り皆との団欒復活祭で

雨模様気になる子等の住む地での万博開会式場の午後

「あんぱん」の子役の演技に引き込まれ涙と笑いの朝ドラを見る

もくもくと茂れる樹々に寄り添いて藤は華やかに咲き盛りおり

塚 本 節 子 ☆ 茨城

蓬餅にきな粉黒蜜まぶし食ぶ口いっぱい春の広がる

メモありて糠も添えある筍の三本届く春の夕ぐれ

キッチンに筍ゆがく香り満つ今宵はシンプル土佐煮を味わう

ように」と教えられたことがよぎった  
が、それも内容次第だと今はわかる。

二首目の「どうってことない」を、  
私も油性ペンで手のひらに書いて見習  
おうと思っている。

【襄陽嚴夫】二首ともに的確な前評で  
充分ではないかとも思うが、以下あえ  
て私見を記す。

一首目の「嬉しき」については、感  
情の表現として最も単純なものの一つ  
であり、安易に使うと作品の味が薄れ  
てしまう。その対象がポイントであり  
この歌の場合、あまりにも当然のこと  
に対して使われているので帰って「嬉  
しき」が一首を新鮮なものにしている。

二首目の「どうってことない」につ  
いては、嫌なことがあったときに自分  
を励ます呪文のようなものであろう。  
一回や二回ではそれほど効果はない  
が、何回か唱えているうちに体に沁み  
込んで、多少のことでは動じないよう  
になると思われる。ただし、落ち込ん  
だり嘆いたりするのは人間として、ま  
た歌を作るうえでも大事なことなの  
で、私は勧めたくない。

●香蘭 二月号

満本好美氏「他誌拝見」より

「冬雷」十月号

・バラバラと先づ音が来て雨粒の塊が  
降るゲリラに遭ひぬ 高橋説子

・墓の前深く頭を下げているあなたに  
かの日のちが重なる 江波戸愛子

●霸王樹 二月号

「受贈歌誌抄」より

冬雷十二月号

長いが「日本原水爆被害者団体協議会」  
を「被団協」とまで略したくなし

大山敏夫

足癒えぬままに降り立つ湯河原の駅に

ひんやり秋風渡る 桜井美保子

カボチャ棚の子蔓の先の勇ましく意思

あるごとく棚から伸びる 正田フミエ

スカイツリー遠く見えたる方角に整然

として居室のガラス 小林芳枝

正月から彼岸すら無く三重苦能登半島

のテレビの激流 村上美江

蓬餅たけのご飯炊きながら春惜しみつつわらびの灰汁抜く  
キュウリ・ナス・トマトにスイカ・ブロッコリーなど八種の苗を植えたり  
不織布を掛けてスイカの種を蒔く九月の収穫夢にみながら  
これなあにどうしてなのと繰り返し呪文のように孫に問われる

立石 節子 ☆ 東京

落ち着いた部屋の色調佇まい静かに読み合う互いの歌を  
川越の短歌の学び深くして先輩方のやさしき声に  
落ち着いた川越歌会の声響き心籠りて真実想う  
一箇月寝かせた歌を投稿す大先輩の声重くして  
歌会は第一回にて静かなり回重なれば思い述べられむ  
リハビリでよろけた人に当てられしその後遺症友を悩ます  
墓前にて父母想い今あるを涙拭きつつ頭垂れたり

井出 裕子 静岡

前回は行きそこねし大阪万博に今年チャンスと意気込みの増す  
パビリオンの見学予約もスマホから我には戸惑ひ多き万博  
日本館開催国の意地なるか緻密な展示に気持浮き立つ  
派手な映像なくも圧巻の内部なり大阪万博の「太陽の塔」  
眼の下に狩野川の水静かなり台風知らるる暴れ川なれど

羽田 孝輝 山形

満開の桜と梅に囲まるる仏となりし父母を見つむる  
父母よ梅に桜に囲まるる気分はどうかと遺影に問ひぬ

## ●青垣 三月号

山田訓氏執筆「私見・あの歌このうた」  
から

冬雷 一月号より

○朝の空に煙ひとすち燻らせて薪ストー  
ブに火を入れる夫 佐藤幸子  
雪国に暮らす人の朝のはじまりだ。  
静かな光景をうまく写生している。「薪  
ストーブ」に郷愁を覚える。

○鰯鯽イカと秋刀魚と鮭鯉買いてしま  
いぬ目が欲しがりて 藤田夏見  
家族数にもよるがずいぶん買いたん  
だものだ。「買えずちゃった！」そ  
んな声が聞こえてくる。結句がいい。

## ●海潮 3・4月号

「受贈歌誌作品抄」より

長いが「日本原水爆被害者団体協議会」  
を「被団協」とまで略したくなし  
大山敏夫「冬雷」12月号

## ●花實 五月号

樫本信子氏「歌誌光茫」より

冬雷 二月号

門に立ち手を振る姿の遠ざかる今日よ

大雪で潰れたるハウス無残なりビニール暴れる五月の風に

大雪で潰れたるハウスの片付けはまだ手に付かず気持ち重し  
こんもりと緑重なる里山を見つむる五月穏やかな午後  
薄く濃く緑連なる山見つむ夕陽を受けて一層萌ゆる  
独活・蕨・こごみ・薇・露の臺リュックいっぱいあふれる五月  
潜らずだけ今年こそは茹で過ぎずさつと湯通す薇の処理

首藤 文江 ☆ 埼玉

待ちに待ちやつと手にした春キャベツ千切りにして大皿に盛る  
筍であれもこれも作りたいなれど高値に買う手が止まる  
病院に添うように下がるこいのぼり元気に泳ぐ風を待ちつつ  
暑くなる前にと心急かされる友と会うのも五月中にと

後藤 恭介 ☆ 茨城

関西の三県まわる観桜ツアー毎日歩く一万歩以上  
十円玉に見し平等院初に見る入場までの長い行列  
山奥の千本桜の吉野山坂の両側に茶店の呼び声

花冷えの有馬の宿でゆっくりすツアーの人との楽しい夕食  
姫路城の天守閣まで登りきて眼下一望の桜と町なみ  
春の宵夢中で読みぬ「ひねくれ一茶」田辺聖子の健筆光る  
庭先に咲き始めるや源平桃高い枝先の紅と白

長谷川 剛 山形

間合ひ取り突いて去なしてその刹那剣先撓りてパンと面打つ



写真歌集  
『桜だより』 桑山則子

カラーでお見せできないのが残念だ  
が、右の表紙カバーも本文二八八ペー  
ジ分もすべて色刷りの美しい一巻。A  
5判の大型サイズも良く生かされる。  
読んでも観ても満足でき得る。「写  
真歌集」というのも納得の好著である。









## 編集 後記

▽なんといつても秋の冬雷大会が楽しみである。一年で一番重要なイベントである。まずは目次上の大会案内にあるように詠草一首を出詠しよう。二百字詰め原稿用紙か、本号巻末に綴込みの大会詠草用紙で事務局へ締切までにお送りいただきたい。皆様からの詠草が多く集まれば、大会運営も活気づく。また参加が可能であればぜひお願いしたい。元気でいるうちに大会でお会いしましょう。

▽「交流他誌紹介」の記事で「新アラギ」はじめ七結社から冬雷会員の作品を取り上げていただいたことを知った。歌を作る上で、批評を読むことはとても勉強になるし励みにもなる。感謝しながら読ませていただいた。

▽急に気温が上がる日もあるのでご自愛ください。（桜井美保子）

▽気が重い最近のニュース。戦争の続くウクライナやガザの民衆の悲惨。攻め込む国の非道さ。トランプの無茶苦茶な言動と関税。上がり続ける米価。ポピュリストのトランプは山口さんの歌の通り恥じらいなど無い。兼目さんはしたたかと歌うが実は無策かも。備蓄米が放出されても下がらない米価。大塚さん、津田さん、児玉さんは高い米を買わねばならない庶民の嘆きを歌う。支援者から貰うから米は買ったことがない、売るほどあると言った江藤拓元農水相には心底呆れた。（橋 美千代）

▽細部はこれからだが、冬雷大会の日時など決まっているところは目次上の通り。ご希望があれば会員の皆様よりの進行情、内容の案を編集部へお願いする。歌壇の情報でも同様ののだが、昨年あたりより、何か開催するにあたり諸経費が大幅に値上がりしており、本年はさらに上乗せがありそう。だ。▽先月号にお知らせした通り、左

記の方の掲載作品欄異動を行う。  
冬雷集へ  
田端五百子氏。  
中村哲也氏。  
山本三男氏。

作品一欄へ  
石渡静夫氏。  
西村邦子氏。  
作品二欄へ  
奥山清子氏。

（大山敏夫）

▽第六十四回冬雷大会の日は十月十二日(日)に決定した。「大会は祭りである」と言った師の言葉をいつも思い出している。会場は毎年お世話になっているホテルトイン東京東陽町。ずつと前に黒田江美子さんが、大会の日が「すつてんばれ」になりますように、と願って晴天だったことがある。よく晴れた秋の一日を皆様にお会いしてご一緒に楽しく過ごしたい。

▽「大友柳太朗と美空ひばり」の二回目は、昭和万葉集に載った四首が紹介されている。講談社から創業七十周年記念として刊行された全二十巻の豪華な本のように。昭和の初めから五十年間の幅

広い歌の中から八万首の作品が収められているという。大友柳太朗の四首からは、厳しい撮影の様子や自分の演技を確認する息詰まるような姿が髣髴とする。一見華やかにみえる芸能界の撮影現場の緊張感の中で、歌はほっと心を解くことのできる存在だったのだろうか。若き日の石田波郷と交わりがあつたということも知り大友柳太朗と短歌の繋がりが少し理解できるようにになった。それにしても一九八五年に七十三歳で亡くなった大友柳太朗が四十年も過ぎた令和の時代になつても自分の歌集に二千円という値が付いていること、こうして読まれていること等、想像できないだろうな、と思うと不思議な気持ちになってくる。

▽寄附御礼  
石渡静夫

▽新入会員紹介  
松田忠一氏(紹介 井上蒼子氏)  
河原木光子氏(紹介 多賀陽美氏)

（小林芳枝）

編集後記

## 《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。  
\*会費は原則として振替にて納入する事。  
A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円  
B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円  
C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円  
D 維持会員（二部購入）二六〇〇〇円  
E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

## 《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。  
冬雷集・作品三欄（メール投稿分）  
・担当 大山 敏夫  
・担当 桜井美保子  
作品二欄・作品三欄（手書き投稿分）  
・担当 小林 芳枝  
・担当 小林 芳枝
- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
- 一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》  
白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。  
Eメールによる投稿は左記で対応する。  
大山 敏夫 tourai-oyama@nifty.com  
小林 芳枝 kysie@nifty.com  
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

|        |       |                    |            |   |               |
|--------|-------|--------------------|------------|---|---------------|
| 《選者住所》 | 大山 敏夫 | 350-1142 川越市藤間     | 540-2-207  | ☎ | 090-2565-2263 |
|        | 小林 芳枝 | 125-0063 葛飾区白鳥     | 4-15-9-409 | ☎ | 03-3604-3655  |
|        | 桜井美保子 | 235-0022 横浜市磯子区汐見台 | 2-2-2-608  | ☎ | 090-6029-0590 |

2025 年 7 月 1 日発行

編集発行人 大 山 敏 夫  
データ制作 冬 雷 編 集 室  
印刷・製本 (株) ローヤル企画  
発 行 所 冬 雷 短 歌 会  
350-1142 川越市藤間 540-2-207  
電話 090-2565-2263  
事 務 局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409  
振替 00140-8-92027  
ホームページ http://www.tourai.jp

頒 価 700 円